昭和62年度

市原市埋蔵文化財緊急調査報告書

菊間向原遺跡

鶴舞広小路遺跡

吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡

北旭台遺跡

１９８８・３

市原市教育委員会

序　　文

首都圏に位置する市原市は、京葉工業地帯の中核都市として、ここ20数年の間に急速に成長し、交通体系の整備・住宅問題等に対応すべく、各種事業計画を着実に進めておるところであります。一方、北に東京湾、南に山間部と田園風景を残す本市は、貝塚や古墳などの埋蔵文化財が多く、奈良時代には一国の中心として国府・国分寺が設置されるなど、古代都市として栄えてきたところでもあります。本市のもつこうした固有の自然・文化は、私どもの先人の残した貴重な遺産であり、本市の発展と合わせ将来にわたって伝えていかなければならないものであり、開発との調和をはかるべく、極力努力を重ねてまいりました。

今回、ここに報告します菊間向原遺跡，鶴舞広小路遺跡，吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡，北旭台遺跡，は、必ずしも歴史の表舞台に登場してくる華々しい遺跡ではありませんが、確実に本市の歴史を知る上で貴重な資料となるものと確信するものであります。本書は、その成果をまとめたものでありますが、広く市民の文化財に対する啓蒙と普及に活用されることを願うものであります。

なお、今回の発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご指導・ご協力を賜わりました、文化庁・千葉県教育庁文化課・㈶市原市文化財センターならびに関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げる次第であります。

昭和６３年３月

市原市教育委員会
教育長　　星野一郎

例　　言

1. 本書は、昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査事業として実施した千葉県市原市に所在する、市内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、文化庁の国庫補助事業として、補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。
3. 調査は、昭和62年６月１日から昭和63年２月20日まで実施した。
4. 本市が実施した発掘調査は下記のとおりである。

(1) 菊間向原遺跡（市原市菊間字向原２８９７～８）

調　　査　　民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。

調査期間　　昭和62年６月１日　～　６月11日

調査面積　　１，３６０㎡

(2) 鶴舞広小路遺跡（市原市鶴舞字広小路３４９～４）

調　　査　　個人の住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。

調査期間　　昭和62年６月16日　～　６月27日

調査面積　　５７４㎡

(3) 吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡（市原市西国吉字吉野１６９７～１０２，１０３）

調　　査　　個人の住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。

調査期間　　昭和62年７月22日　～　８月26日

調査面積　　４４６㎡

(4) 北旭台遺跡（市原市磯ヶ谷字旭台９６～１，１０３～３ほか）

調　　査　　民間事業者によるゴルフ練習場建設に伴う発掘調査で、遺跡の状況・範囲を確認した。

調査期間　　昭和62年８月27日　～　９月８日

調査面積　　5,２００㎡

本　文　目　次

序　　文
例　　言
㈶市原市文化財センター組織表
第１章　調査遺跡の位置と考古学的環境 ---------- 1
第２章　菊間向原遺跡 ---------- 10
第３章　北旭台遺跡 ---------- 18
第４章　吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡 ---------- 28
第５章　鶴舞広小路遺跡 ---------- 45

挿　図　目　次

調査遺跡の位置と考古学的環境
第１図　菊間向原遺跡周辺の主な遺跡分布図 ---------- 2
第２図　北旭台遺跡周辺の主な遺跡分布図 ---------- 2
第３図　吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡周辺の主な遺跡分布図 ---------- 3
第４図　鶴舞広小路遺跡周辺の主な遺跡分布図 ---------- 3
菊間向原遺跡
第１図　調査範囲と周辺地形図 ---------- 10
第２図　遺構検出状態図 ---------- 11
第３図　グリッド名称図 ---------- 11
第４図　炉穴及び竪穴住居跡 ---------- 12
第５図　出土土器（１） ---------- 12
第６図　出土土器（２） ---------- 13
第７図　方形周溝状遺構 ---------- 15
第８図　その他の検出遺構 ---------- 17
北旭台遺跡
第１図　調査範囲と周辺地形図 ---------- 18
第２図　地形図及び遺構分布図 ---------- 19
第３図　７号遺構 ---------- 21
第４図　７号遺構出土遺物 ---------- 22
第５図　７号遺構出土遺物 ---------- 23
第６図　８号（Ａ・Ｂ）遺構 ---------- 23
第７図　10号遺構 ---------- 24
第８図　10号遺構出土遺物 ---------- 25
第９図　遺構外出土遺物 ---------- 26
吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡
第１図　調査範囲と周辺地形図 ---------- 28
第２図　遺構分布図 ---------- 29
第３図　002住居跡・003方形周溝墓 ---------- 32
第４図　004・005遺構 ---------- 33
第５図　ミニチュア土器 ---------- 34
第６図　003方形周溝墓出土弥生土器・土師器 ---------- 35
第７図　003方形周溝墓出土弥生土器・土師器・土玉 ---------- 36
第８図　005遺構出土弥生土器・土師器 ---------- 38
第９図　吉野１号墳周溝・004遺構出土

弥生土器・土師器 ----------40
第10図　吉野１号墳出土須恵器 ----------41
第11図　吉野１号墳出土埴輪（１） ----------42
第12図　吉野１号墳出土埴輪（２） ----------43
付　図　吉野１号墳・発掘区とグリッド配置図

鶴舞広小路遺跡

第１図　調査範囲と周辺地形図 ---------- 45
第２図　調査区域と検出した遺構 ---------- 45
第３図　土　　壙 ---------- 46

図　版　目　次

図版１・２　菊間向原遺跡
図版３～５　北旭台遺跡
図版６～11　吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡
図版12　鶴舞広小路遺跡

㈶市原市文化財センター組織表　（昭和62年度）

役　員

理 事 長　星野一郎（教育委員会教育長）
副理事長　大野　皎（教育委員会教育指導部長）
常務理事　岩見一民（専　任）
理　　事　滝口　宏（早稲田大学名誉教授）
理　　事　寺村光晴（和洋女子大学教授）
理　　事　海上信久（姉崎神社宮司）
理　　事　飯山英雄（市企画部長）
理　　事　宮崎芳雄（市総務部長）
理　　事　地引希壹（市都市部長）
理　　事　安藤隆一（市総務部財政課長）
監　　事　元吉末喜（市会計課長）
監　　事　斎藤崇雄（教育委員会総務課長）

職　員

庶務課　課　　長　田丸萬富
　　主　事　補　大鐘光江
　　事務員（嘱託）　秋田晴美
　　事務員（嘱託）　石渡あゆみ
調査課　課　　長　清藤一順
　　主　　幹　石田広美
　　主　　幹　加藤正信
　　主任調査研究員　宮本敬一
　　主任調査研究員　米田耕之助
　　調 査 研 究 員　田中清美
　　調 査 研 究 員　浅利幸一
　　調 査 研 究 員　大村　直
　　調 査 研 究 員　近藤　敏
　　調 査 研 究 員　高橋康男
　　調 査 研 究 員　田所　真
　　調 査 研 究 員　木對和紀
　　調査研究員（嘱託）田中新史
　　調査研究員（嘱託）半田堅三
　　事務員（嘱託）　高浦貞子
　　事務員（嘱託）　田中裕子

第 1 章　調査遺跡の位置と考古学的環境

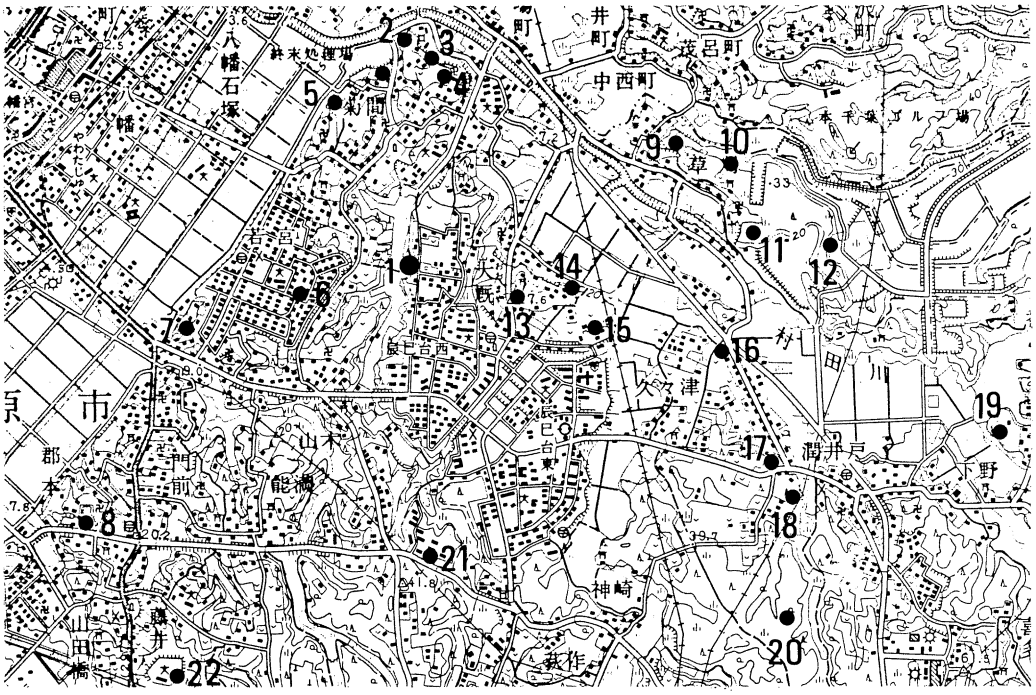
千葉県市原市は、房総半島の中央部に南北に長く市域を形成し、県下最大の面積を有する市である。市の中央部には、南北に養老川が流れ、その両岸域には、養老川の沖積地とそれに続く丘陵地域が広がっている。

養老川は、太平洋側の所謂外房地域に於いて、日蓮上人が幼時修行し、立教開宗を宣言した寺として、広く知られる清澄寺の在る清澄山麓に源を発する房総有数の河川である。その上流域では、第三紀の地層を削り、奥深い谷間を流れ行くが、市内高滝の辺から、徐々に平坦地へと移って行く。平坦地に出た川は、以前にも増して蛇行の幅を大きくし、以来、東京湾に注入する間、幾多の曲流（メアンダー）を残して行くことになる。

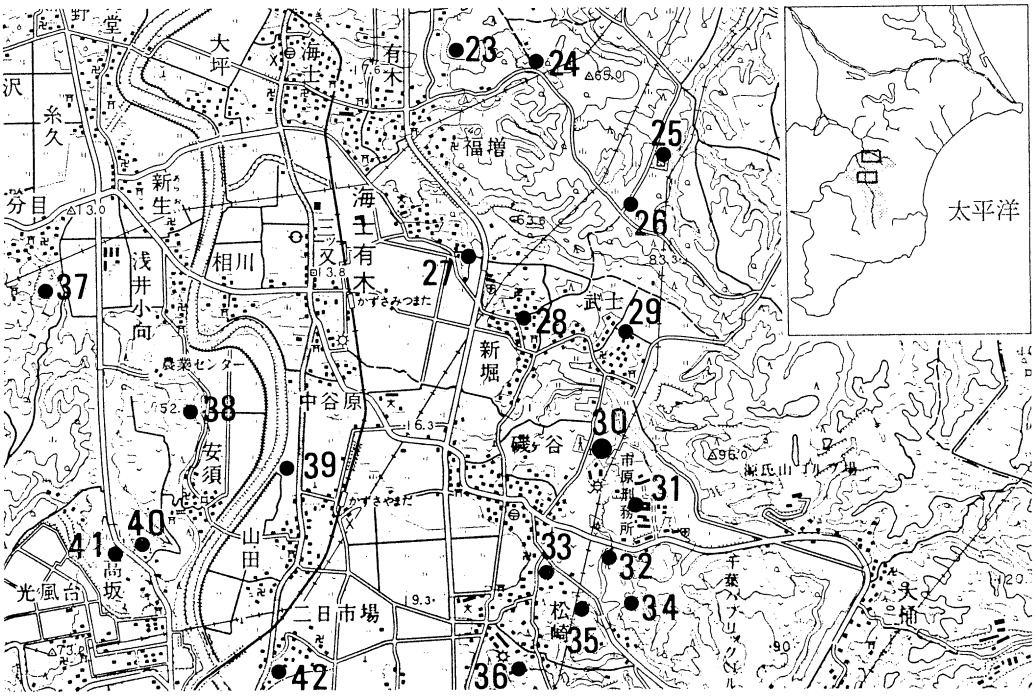
養老川の残した曲流は、後に豊かな水田地として、市原に於ける農業を発展させた経済基盤を提供して来たとも言える。また、養老川河口から海浜部は、嘗ては、海苔の養殖地として栄え、青柳の名で親しまれている二枚貝の産地としても広く世に知られている程、豊かな海産資源を提供していた所である。

かかる自然環境に恵まれた当地域は、首都東京の近郊に位置するといった地理的要因から、近年に至ってベッドタウンとしての宅地造成や、なだらかな丘陵地を利用したゴルフ場の建設が活発に行われ、特に海浜部は埋め立てられ京葉工業地帯へと一変し、嘗ての面影を残す所が少なくなって来たのが現状である。

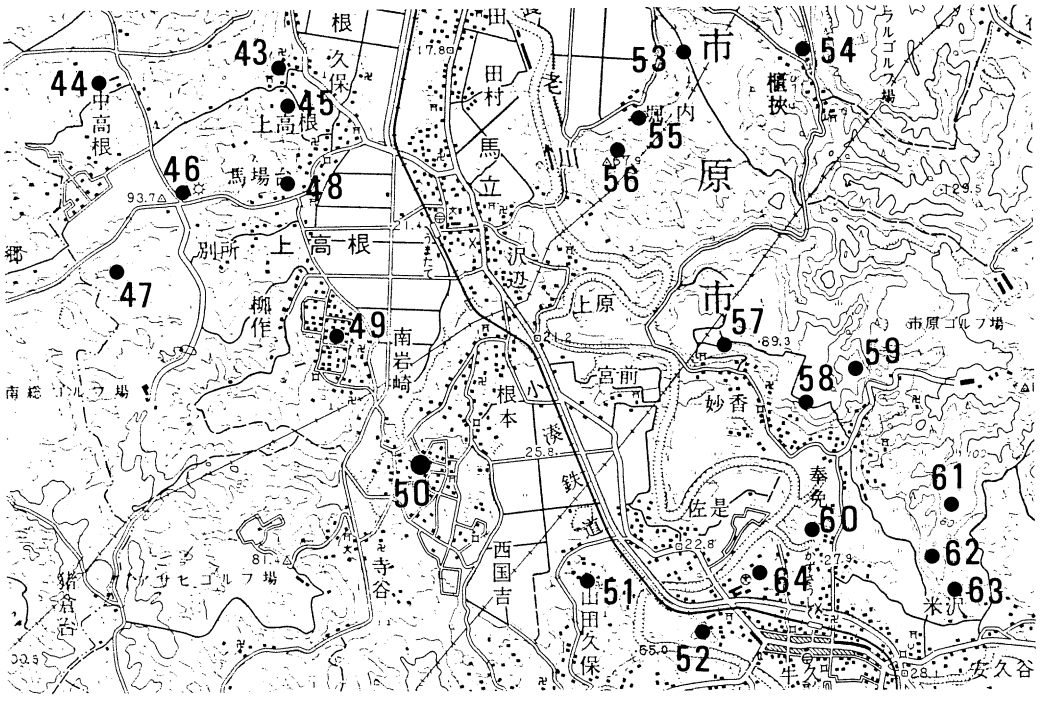
こういった、開発行為に伴い、市内の至る所で古代人の残した生活の跡が調査される機会も多くなり、これまで不明な点の多かった当地域の歴史が解明される糸口を見ることが間々あるようになっている。当地は、奈良・平安時代に上総国の中心地として栄えたところであり、特に養老川河口の右岸台地は、上総国分僧・尼寺の建立された地として、現在も国分寺台の愛称で親しまれている地域である。この国分寺台の中心部に市庁舎が建設され、周辺地域が大規模な宅地造成の対象となったため、昭和47年から発掘調査が行われている。この地は、国分寺跡を包含するため、国分寺に関連した集落遺跡や、瓦窯跡等の生産遺跡の存在も然る事ながら、縄文時代では、西広貝塚，祇園原貝塚といった馬蹄形を呈する二つの大型貝塚をはじめとする集落跡、弥生時代では、一遺跡で数百軒にのぼる住居跡の検出された台遺跡・御林跡遺跡に代表される集落跡、あるいは、諏訪台遺跡に見られる方形周構墓群などがあり、また、古墳時代に至っては、東国最古の古墳として話題を集めた神門古墳群、一遺跡で4世紀から9世紀にかけて累々と 200基に及ぶ古墳・墓跡が形成されている諏訪台古墳群、あるいは、最古の有銘鉄剣の出土した稲荷台1号墳など関東を代表する遺跡も多く見られる所である。



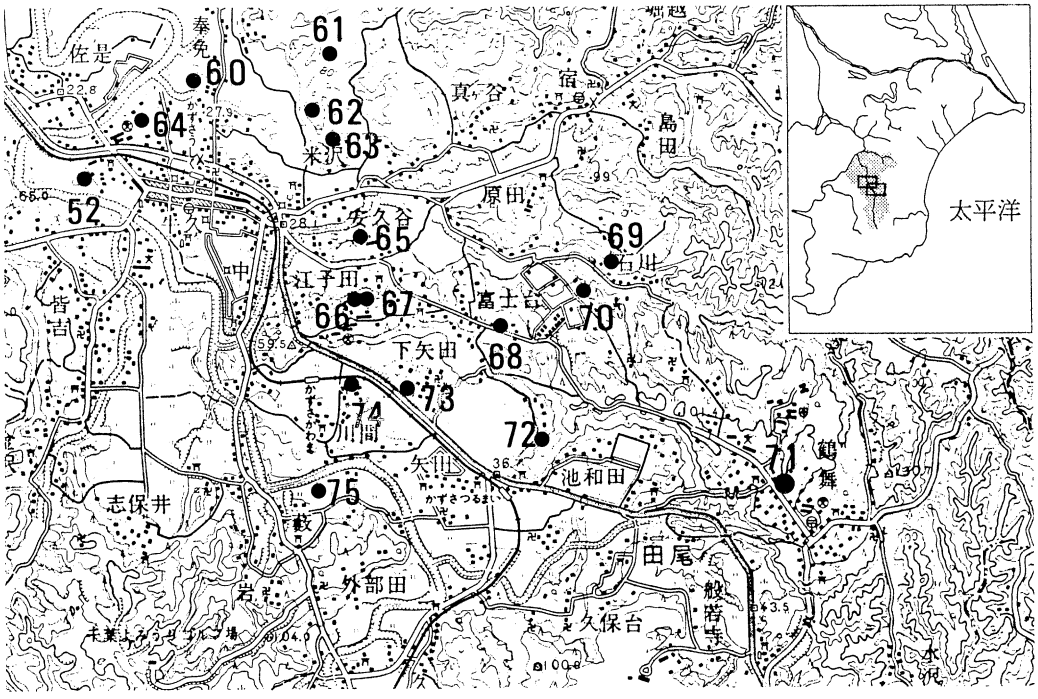
第１図　菊間向原遺跡周辺の主な遺跡分布図　　１：50,000



第２図　北旭台遺跡周辺の主な遺跡分布図　　１：50,000



第 3 図　吉野 1 号墳・南岩崎吉野遺跡周辺の主な遺跡分布図　　1：50,000



第 4 図　鶴舞広小路遺跡周辺の主な遺跡分布図　　1：50,000

第1表　周辺の主な遺跡

1. 菊間向原	集落、墓跡	26. 武士	集落	51. 佐是	古墳群
2. 新皇塚	古墳	27. 叶台	包蔵地	52. 牛久石茶坂	古墳群
3. 菊間	集落、墓跡	28. 新堀	古墳群	53. 大城台	古墳群
4. 姫宮	古墳	29. 武士	古墳群	54. 峠台	古墳群
5. 菊間手永	貝塚、集落、墓跡	**30. 北旭台**	集落、古墳	55. 土宇	集落
6. 若宮	集落	31. 市原刑務所内	古墳群	56. 掘之内向	古墳群
7. 白船城	集落、城跡	32. 広作	包蔵地	57. 妙香	古墳群
8. 郡本	集落	33. 松崎	古墳群	58. 奉免	古墳群
9. 草刈	古墳群	34. 滝山	古墳群	59. 上原台	炉穴群、墓跡、集落
10. 草刈	貝塚、集落	35. 法伝台	古墳群	60. 沢	集落
11. 草刈六之台	集落	36. 新道塚	古墳群	61. 金堀台	古墳群
12. 川焼台	集落、古墳	37. 分目	古墳群	62. 境部田岱	古墳群
13. 大厩	古墳群	38. 安須	古墳群	63. 稲荷台	古墳群
14. 大厩浅間様	古墳	39. 山田大宮	墓跡	64. 牛久	古墳群
15. 大厩	集落	40. 高坂	古墳群	65. 南総中学校	墓跡
16. 潤井戸西山	集落	41. 高坂瓜ヶ岱	貝塚	66. 雪解沢	集落
17. 杉山	古墳	42. 二日市場	廃寺跡	67. 江子田金環塚	古墳
18. 潤井戸山王後	古墳群	43. 久保台	古墳群	68. 富士台	古墳群、集落
19. 永吉権現山	古墳群	44. 南原	包蔵地	69. 石川	古窯跡
20. 下鈴野	集落、墓跡	45. 上高根	貝塚	70. 大蔵屋	包蔵地
21. 南大広	集落	46. 上高根	古墳群	**71. 鶴舞広小路**	粘土採掘跡
22. 千草山	集落	47. 萩ノ原	集落、廃寺跡	72. 池和田	古墳群
23. 山倉天王	貝塚	48. 上高根打越	群集塚	73. 知代	包蔵地
24. 福増	古墳群	49. 報恩寺	古墳群	74. 下矢田沢田	包蔵地
25. 勝間	集落	**50. 吉野**	古墳群	75. 薮マギノウ	包蔵地

第1表遺跡関係文献

2　斎木勝他　「新皇塚古墳」『市原市菊間遺跡』㈶千葉県都市公社　昭和49年

3　斎木勝他　「菊間遺跡」『市原市菊間遺跡』㈶千葉県都市公社　昭和49年

5　鷹野光行　「市原市菊間手永貝塚採集の土器片」『伊知波良3』伊知波良刊行会　昭和55年
近藤敏　「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』㈶市原市文化財センター　昭和60年

6　市毛勲他　「若宮遺跡（C地区）」『市原市周辺地域の調査』土師書院　昭和42年

7　石田広美　『白船城跡』㈶市原市文化財センター　昭和62年

8　石田広美　「郡本遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』㈶市原市文化財センター　昭和61年

10　高橋康男　『草刈遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和60年

11　「草刈六之台遺跡」『千葉県文化財センター年報No.6』㈶千葉県文化財センター　昭和55年

12　「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報No.10』㈶千葉県文化財センター　昭和59年
榊原弘二・山口典子　「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌第7・8合併号』㈶千葉県文化財センター　昭和59年

14　浅利幸一　「大厩浅間様古墳」『市原市文化財センター年報昭和59年度』㈶市原市文化財センター　昭和60年

15　三森俊彦他　『市原市大厩遺跡』㈶千葉県都市公社　昭和49年

16　鈴木英啓　『潤井戸西山遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和61年

20　大村直　『下鈴野遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和62年
21　坂井利明・市毛勲　「南大広遺跡」『南大広遺跡・海保古墳群』千葉県市原市教育委員会　昭和43年
22　田中清美他　『千草山遺跡発掘調査報告書』千草山遺跡発掘調査団　昭和54年
米田耕之助　「千草山遺跡」『市原市文化財センター年報昭和59年度』㈶市原市文化財センター　昭和60年
23　米田耕之助　「山倉天王貝塚（養老川流域の縄文時代遺跡２）」『伊知波良２』伊知波良刊行会　昭和54年
24　中村恵次他　「福増古墳群」『市原市周辺地域の調査』土師書院　昭和42年
田所真他　『池ノ谷遺跡・福増遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和60年
26　半田堅三他　『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団　昭和51年
39　米田耕之助　『山田大宮遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和61年
42　郷堀英司他　『市原市二日市場廃寺遺跡確認調査報告』千葉県教育委員会　昭和59年
44　大塚達朗他　「市原市南原遺跡第1次調査抄報」『伊知波良1』伊知波良刊行会　昭和54年
大塚達朗他　「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良4』伊知波良刊行会　昭和55年
45　武田宗久・金子浩昌　「千葉県市原郡上高根貝塚」『日本考古学年報14』誠文堂新光社　昭和41年
47　寺門義範他　『千葉県萩ノ原遺跡』日本文化財研究所　昭和50年
55　柿沼修平他　『土宇』日本文化財研究所　昭和54年
59　大村直　「奉免上原台遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』㈶市原市文化財センター　昭和61年
60　米田耕之助他　『沢遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和62年
64　増田精一他　「牛久第III号墳調査抄報」『千葉県埋蔵文化財抄報３』千葉県教育委員会　昭和47年
65　上條朝宏他　『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会　昭和53年
66　金丸誠　『市原市雪解沢遺跡』㈶千葉県文化財センター　昭和59年
67　武田宗久　「南総町江子田瓢箪塚古墳」『千葉県遺跡調査報告』千葉県教育委員会　昭和39年
武田宗久他　『上総江子田金環塚古墳発掘調査報告書』千葉県市原市教育委員会　昭和60年
68　近藤敏　『南富士台遺跡』㈶市原市文化財センター　昭和62年
72　「鶴舞町池和田横穴」『史蹟名勝天然記念物調査第六輯』千葉県　昭和４年
75　石本俊則他　『市原市藪遺跡』市原市藪遺跡調査会　昭和57年

市原市域には、国分寺台以外の地に於いても多くの遺跡を散見することができる。特に、養老川を挟んで国分寺台と対峙する現姉崎地区には、二子塚，天神山古墳に代表される大型前方後円墳が密集する所であり、養老川中流の現牛久の地にも、江子田金環塚をはじめとする古墳が形成されるなど、各地域に大，小の古墳群を見ることができる。

以下、今年度に実施した市内遺跡群調査関係の遺跡周辺地域について、簡単に触れてみることにする。市内遺跡群の対象となった遺跡は、(1)菊間向原遺跡，(2)北旭台遺跡，(3)吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡，(4)鶴舞広小路遺跡の４遺跡である。

(1) **菊間向原遺跡**は、第１図中１として番号を付した地点に位置している。行政区画上の地籍は、市原市菊間字向原2897～８番地である。第１図を見ても明らかなように、東京湾東岸に流入する村田川に向かう南北に開析された支谷の右岸台地上の西側暖斜面に占地し、標高50mほどを有する。当遺跡周辺の遺跡を瞥見すると、先づ同一台地上の東側の大厩地区には、弥生時代の集落としての大厩遺跡，前期古墳の大厩浅間様古墳などがある。

大厩遺跡は、その一部が宅地造成に伴ない調査されており、縄文時代早期の炉穴群、弥生時代中・後期の竪穴住居跡64軒，古墳時代の竪穴住居跡14軒などが検出されているが、中でも弥生時代中期の宮ノ台式期に比定される住居，遺物が多く検出され注目を集めた遺跡である。また、大厩浅間様古墳は、その一部が(財)市原市文化財センターにより調査され、周溝外径64mを測る大型の円墳であることが確認され、３基の木棺直葬による埋葬施設を検出している。３基の埋葬施設からはそれぞれに遺物が発見されている（１号＝珠文鏡１，石釧１，刀子１，瑪瑙勾玉２，琥珀勾玉７，琥珀棗玉４，琥珀小玉19，管玉53，ガラス小玉31，ガラス勾玉１，２号＝ガラス小玉４，短剣１，３号＝滑石製臼玉７，鉄片２）。主体部出土の遺物あるいは墳丘から出土した壺型土器などから４世紀末から５世紀初頭の年代観が与えられている。

大厩の遺跡群の東側には谷を挟んで久々津、潤井戸にかけて多くの遺跡が見られるが、第１図には主な遺跡として潤井戸西山，杉山，山王後と下鈴野遺跡を挙げた。この内、西山と下鈴野遺跡については発掘調査が行われている。

潤井戸西山遺跡は、道路建設に伴って遺跡の一部が調査され、縄文時代～奈良時代の遺構・遺物が検出されている。縄文時代では、５基の陥し穴が検出され、構造の相違から陥し穴を２類に分けている。弥生時代では宮ノ台式期の竪穴住居跡１軒と環濠が検出されているが、最も多くの遺構が見られたのは、古墳時代の竪穴住居跡24軒である。古墳時代住居は、五領から鬼高式期に至る住居が確認され、中でも鬼高式期として10軒の竪穴住居跡が確認されている。また、奈良時代の遺構として竪穴住居跡１軒の他、掘立柱建物跡と四脚門を伴う柵列塀とが検出されている。

下鈴野遺跡は、帝京技術科学大学建設に伴う調査であるため、対象面積も大きく32,200m²の

広範囲に亘り発掘調査が行われた遺跡である。当遺跡からは縄文時代の竪穴住居跡３軒，小竪穴３基，集石土壙２基，陥し穴43基，弥生時代末～古墳時代の竪穴住居跡34軒，古墳５基，奈良・平安時代の方形周溝状遺構９基，溝２条などが検出されている。

菊間向原の北方１kmの村田川に面する地域の台地上にも遺跡が集中している。主な遺跡として新皇塚古墳，菊間遺跡，姫宮古墳，菊間手永貝塚などがあるが、これらの内、新皇塚，菊間，菊間手永貝塚については発掘調査が行われており、遺跡の内容把握が成されている。

新皇塚古墳については、古墳の部分的調査であるため、墳形等について不明瞭な部分もあるが、長径60m前後の前方後方墳であると思われる。内部施設は粘土槨により作られ、東西方向に主軸線を有する南棺，北棺の二棺が検出されている。出土遺物は、南棺から小形彷製珠文鏡１，管玉５，ガラス玉１，鉄槍１，鉄刀１，刀子１，鑿１，ヤリガンナ１，鎌１，鉄斧１、北棺からは、彷製内行花文鏡１，石釧１，勾玉２，管玉94，鉄剣１，刀子５，ヤリガンナ１，鉄鏃１，鎌２，鍬先１，鉄斧１などが出土している。また、時期的には、先の大厩浅間様古墳と近い時期に形成された古墳として考えられている。

菊間遺跡としたのは、新皇塚古墳の南東 100mの地点であり、遺跡としての広がりは新皇塚古墳と重複するものである。検出遺構は、弥生時代の竪穴住居跡49軒，古墳時代の竪穴住居跡６軒，周溝遺構８基などがあるが、特に宮ノ台式期の遺構・遺物の出土は、先の大厩遺跡と共に注目されている。

菊間手永貝塚は、２度に亘り発掘調査が行われ、縄文時代～奈良・平安時代に至る遺構・遺物が発見されている。縄文時代では、竪穴住居跡，小竪穴をはじめ、安行期の墓域などがあり、弥生時代で竪穴住居跡，Ｖ字溝が、古墳時代では、竪穴住居跡，古墳周溝などが検出されている。特に、調査区域に接して、菊間天神山古墳が現存しており、同周溝部からは、円筒・形象埴輪片も出土している。また、奈良・平安時代では、菊間廃寺跡が近接していることもあり、鐙瓦片などの出土も見られる。

(2) **北旭台遺跡**は、第２図の30を付した地点に位置している。行政区画上の地籍は、市原市磯ヶ谷字北旭台87－２番地他である。第２図に見るように北流する養老川の右岸の小支谷に面する台地上に占置している。図の如く、当遺跡の周辺地域にも多くの遺跡が現存するが、第２図には、主な遺跡について位置を記入してある。これらの遺跡には、縄文時代から歴史時代に至る各時期の遺跡が見られる。23とした山倉天王貝塚は、山林中に現存する馬蹄形の大貝塚で、厚さ１m以上にも達する貝層の堆積が数ヶ所確認されており、縄文中期～晩期の土器が出土している。山倉天王貝塚の東側には福増古墳群が在る。福増古墳群は、円墳10基などからなる古墳群で、第１・２号墳の２基について昭和41年に調査され、複室構造をもつ横穴式石室による内部施設が検出され注目されている。また、この古墳群については、昭和58年に至って、第３

号墳について、㈶市原市文化財センターが一部発掘調査を実施している。この際には、内部施設は確認されなかったが、盛土内及び下層部から縄文時代晩期末葉の土器群が発見されている。この種晩期末葉の土器群は、市内に於いても出土例が少なく、僅かに西広や祇園原貝塚といった大型貝塚の一部で出土しているにすぎない状態であった。近年、晩期末葉頃の土器が、後述する武士遺跡の調査時に確認され、距離的に近くに位置する武士・福増の2遺跡間の関連が注目されている。

武士遺跡は、水道管埋設工事に先立ち昭和50年に調査が行われ、縄文時代の炉穴，後期の竪穴住居跡，弥生時代後期の竪穴住居跡などを検出していたが、昭和62年度事業として台地東側部の調査が県文化財センターにより進められ、須和田式期の墓跡及び、先述した如く晩期末葉期の土器群が出土している。

北旭台遺跡の在る台地上南側には、幾つかの古墳群が散在するが、調査例に乏しく明確には把握されていない。

なお、北旭台遺跡の西側、現養老川の流れる地域に至る間の段丘面上にも遺跡が確認されている。一つは、39とした山田大宮遺跡である。当遺跡の一部が郵便局移転に伴い調査され、弥生時代中期、宮ノ台式期の方形周溝墓群が発見されている。本地域は、段丘下位面上であり、従来あまり注意されなかった低地面に位置する遺跡として重要視されている。また、今一つは、42とした二日市場廃寺跡である。当跡は、大和紀寺式に属する軒丸瓦が出土したことによって注目を集めた廃寺跡であり、昭和58年に県文化財センターによって確認調査が実施され掘立柱建物跡及び溝跡と7世紀後半から8世紀後半までの間に比定される瓦が出土している。

⑶ **吉野1号墳・南岩崎吉野遺跡**は、第3図中50を付した地点に位置している。行政区画上の地籍は、市原市西国吉字吉野1697～ 102番地他である。当地域には、吉野古墳群と呼ばれる50基ほどからなる古墳群があり、今回の調査地は、古墳群中の中心部に位置する吉野第1号墳の北側に接した地点で、発掘調査によって周溝の一部を検出している。吉野1号墳は、全長50mを測る前方後円墳で市の指定史跡として保存されている古墳である。

周辺の遺跡には、第3図にみるように、養老川の段丘面に面する地域に多くの遺跡がある。養老川左岸地域には、図中43～52に示した地点等が主な遺跡所在地として挙げられる。これらには、貝塚をはじめ、集落跡，廃寺跡，古墳群，群集塚などがあるが、発掘調査の行われた遺跡は少数であり、調査の行われていない遺跡が多くある。

発掘調査の施行された遺跡には、南原遺跡，上高根貝塚，荻ノ原遺跡などを挙げることができる。南原遺跡は、有舌尖頭器が採集され縄文時代草創期に位置付けられる土器群が散布していることから、東京大学の諸氏により昭和53年と昭和54年の2回に亘り発掘調査が行われ、多数の有舌尖頭器を含む石器群と隆起線文土器を主体とした土器群が発見されている。

上高根貝塚は、養老川流域最奥部に位置する貝塚として、古くから研究者間には衆知の貝塚である。昭和36年に武田宗久・金子浩昌氏を中心として南総郷土史研究会により発掘調査が行われ、堀ノ内式期を主とする遺物類を検出している。

萩ノ原遺跡では、集落，廃寺跡などが検出されているが、瓦塔片なども出土している。

一方、養老川右岸域では、台地上に古墳群を多く見るが、そのほとんどは発掘調査が行われていない例が多く、調査の施行された遺跡例としては、土宇遺跡，上原台遺跡，沢遺跡，牛久古墳群などがある。

土宇遺跡では、 128軒に及ぶ住居跡が検出されている。この内、主体を占めるのは弥生時代に位置づけられる住居跡で、85軒が検出されているが、全て後期に位置づけられる住居跡群である。他は、縄文時代中期（加曽利Ｅ式期）の住居跡16軒と古墳時代の住居跡27軒及び溝状遺構，古墳周溝と思われる円形周溝３基を検出している。

上原台遺跡は、ゴルフ場増設に伴い発掘調査が実施されたため、調査の対象地域は広範囲に亘っている。調査区域からは、縄文時代早期の炉穴群，同前期の竪穴住居跡19軒，中期１軒の他、古墳時代以降の遺構には、竪穴住居跡３軒，方墳及び方形周溝状遺構35基，円形周溝１基と溝14条などが確認されている。

沢遺跡は、南総運動場広場建設に先行して調査を行った遺跡で、古墳時代以降の遺構・遺物が検出されている。本遺跡は、養老川段丘面上に占地した遺跡であるため、台地上の遺跡と比べ竪穴住居等の建てられている地盤は、粘土質が多く遺構の検出は困難を極めた。

当遺跡では、４地区に分け調査を行っているが、内Ｂ地区では、竪穴住居跡，工房跡及びそれらを囲むように配置された溝跡などが検出され、また、Ｄ地区では掘立状建物跡，竪穴住居跡，土器集積地などが発見されている。

(4)　鶴舞広小路遺跡は、第４図中71とした地点に位置している。行政区画上の地籍は、市原市鶴舞字広小路349-４番地である。図を見ても明らかなように、当遺跡周辺には余り遺跡が確認されてなく、鶴舞城跡が近接した遺跡として挙げられる程度である。それに比べ、牛久周辺特に牛久の南東部分に多くの遺跡を見ることができる。

これらの中で、昭和46～47年にかけて発掘調査の行われた南総中学遺跡は、当時調査例の稀な宮ノ台式期の方形周溝墓群の検出されたことにより話題を集めた遺跡である。また、昭和38年に南総郷土史研究会が主体となって調査を実施した江子田金環塚古墳が当地域に於ける最も重要な遺跡として挙げられる。当古墳は全長60ｍを測り、二重周溝を巡らす前方後円墳で木棺による埋葬施設を有し、６世紀前半に位置づけられている。出土遺物には、十字形鎖板，雲珠，杏葉，尻繋などの馬具をはじめ鉄鉗，鉄鍬，金環，首飾り，須恵器などが出土している。

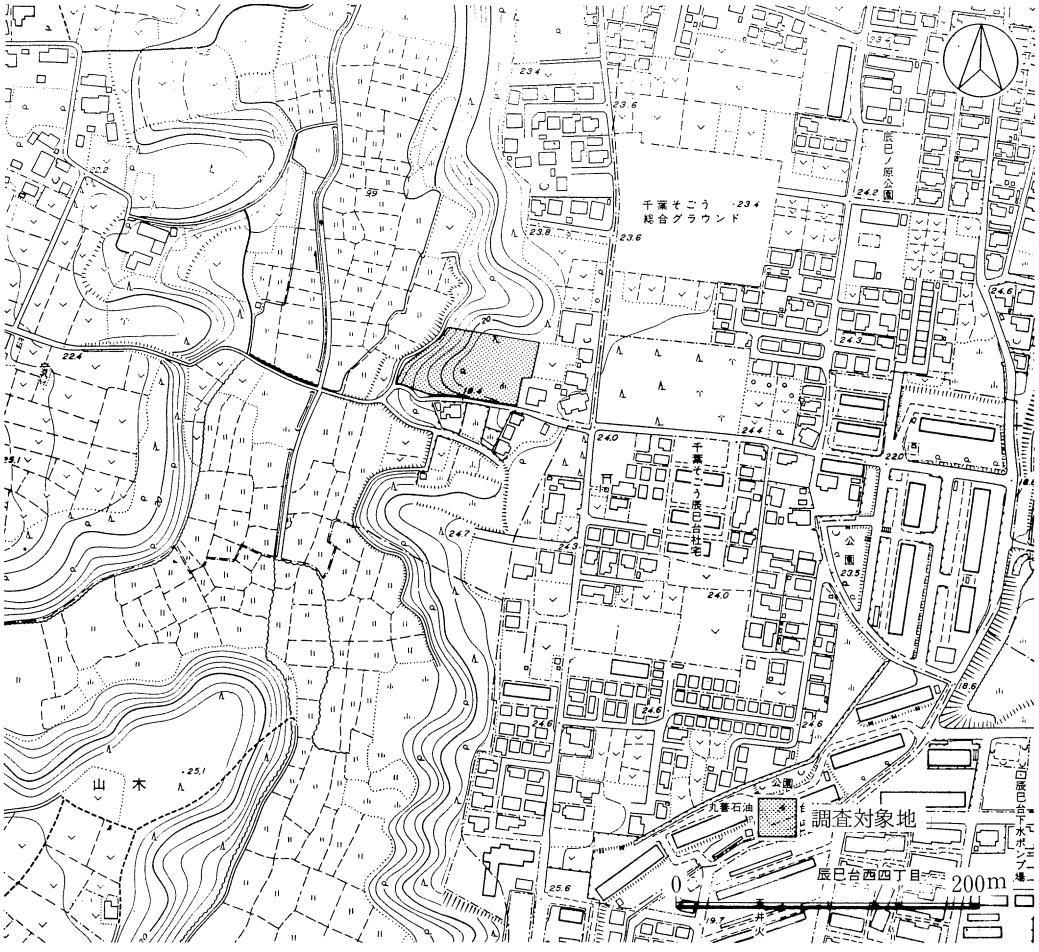
（米田耕之助）

第２章　菊間向原遺跡

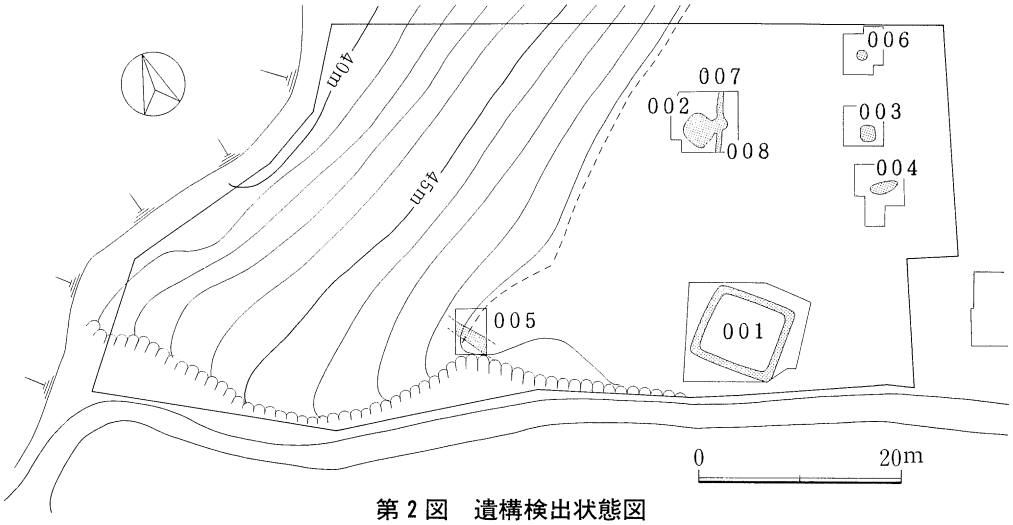
菊間向原遺跡における今回の発掘対象地域は、第１図及び第２図に見るように、その西側部分に斜面部を含んだ所である。

発掘調査にあたって、先づ調査区域を覆う40m×40mを最大区画とするグリッドを設定した（第３図）。この大グリッドを西側からＡ～Ｃ区とし、更に大グリッド内を４ｍ×４ｍの小区画とするグリッド 100区画を設け、図示するように北西隅を00とし、南東隅を99となるようグリッド番号を付した。

調査は、はじめに調査区域内の遺構状態の確認を目的として、２ｍ×４ｍの範囲を持つ最小区画のグリッドを調査対象面積の10％を目安として、全体に平均的に配置し、これを掘り下げ



第１図　調査範囲と周辺地形図

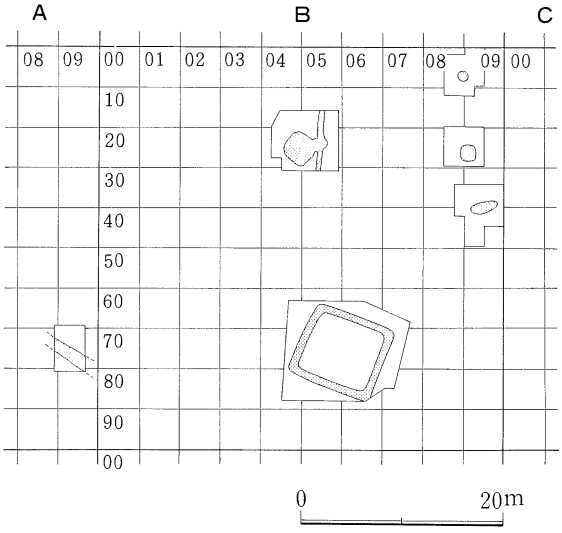


第２図　遺構検出状態図

遺構の存在，状況を確認した。

確認調査の結果、Ｂ24・25区，Ｂ08区，Ｂ29区，Ｂ39区，Ｂ65区，Ｂ86区，Ａ79区などにおいて遺構と思われる落ち込みが確認されたため、それぞれの区域を右図に示した如く拡張し、遺構の広がりを把握した。

範囲の確定したそれぞれの遺構には、上図に見るように001～008までの遺構番号を与え、遺構内充満土壌の堆積状態を観察する目的を持ってセクションベルトを遺構中央部に設定し、他の部分の掘り下げを開始した。以下、検出された遺構・遺物の概略を記す。

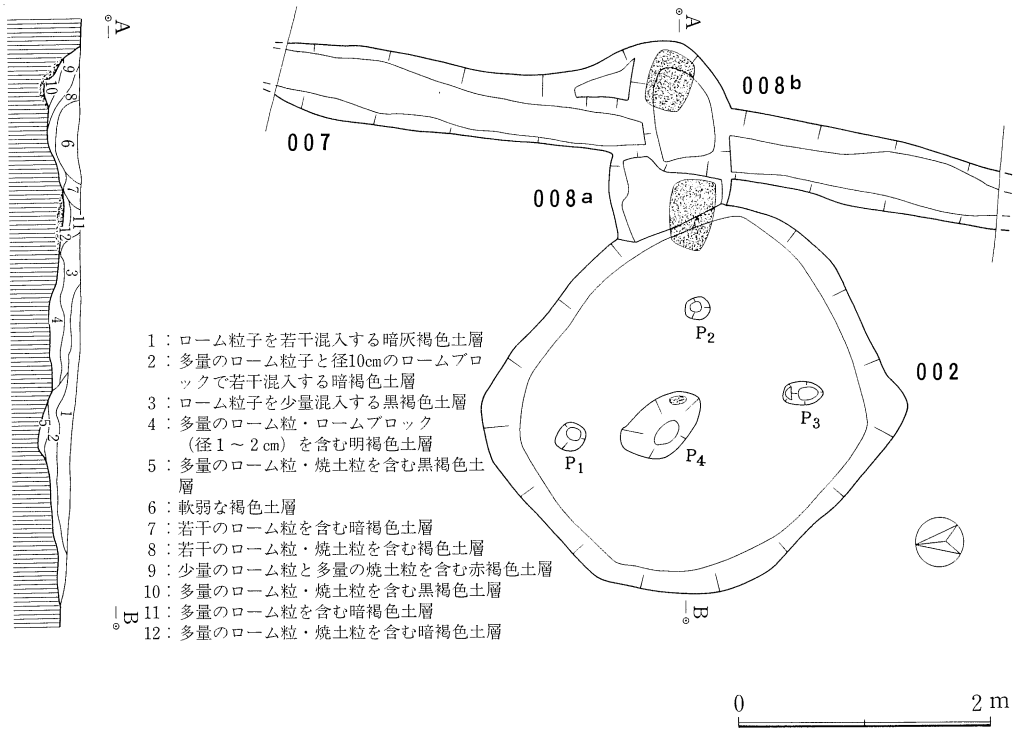


第３図　グリッド名称図

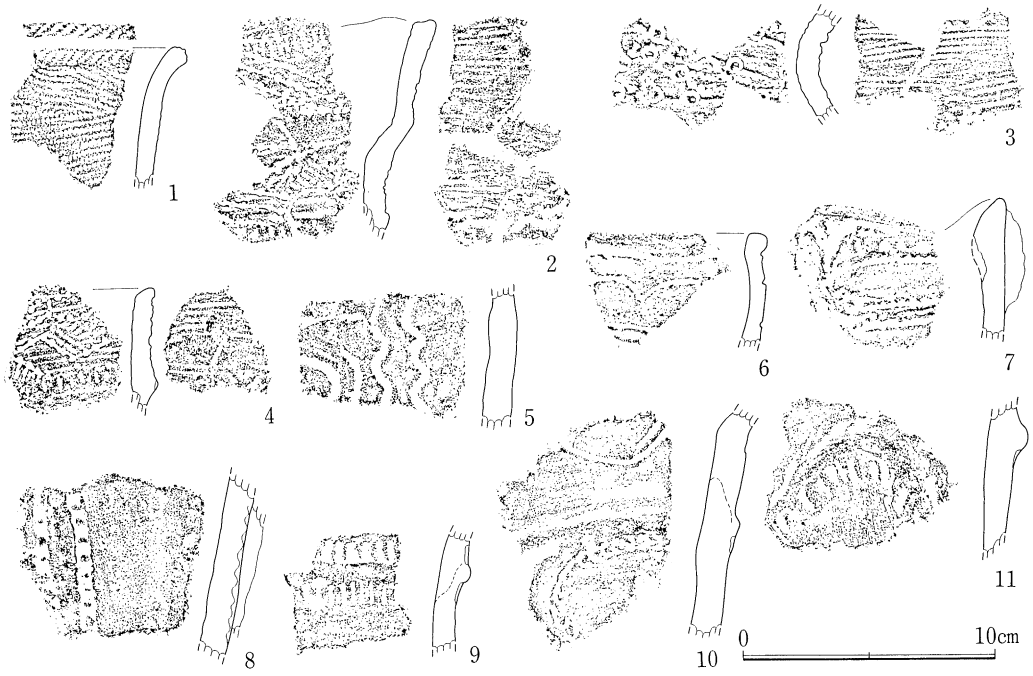
竪穴住居跡（第４～６図、図版１）

Ｂ24～25区に跨って検出されている。第４図に見るように２.８×３.１ｍほどの規模を有する隅丸方形の竪穴住居跡(002)である。

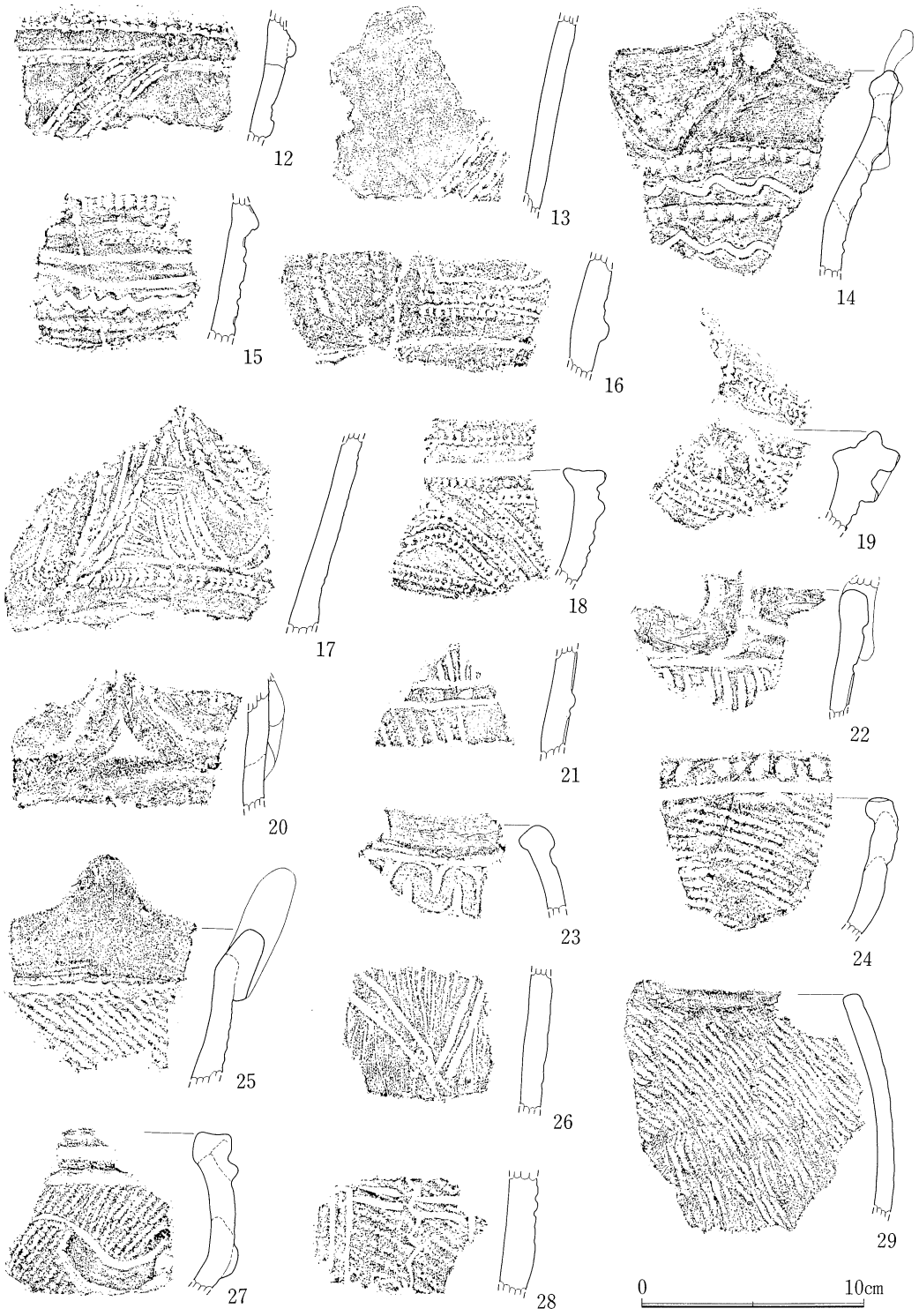
住居の西側隅部において一部炉穴と重複している。炉穴との重複関係は、第４図の断面部に見るように、住居が炉穴を切る形で掘り込まれており、炉穴と住居との新旧関係を明確に捉えることができる。



第4図　炉穴及び竪穴住居跡



第5図　出土土器(1)



第6図　出土土器(2)

住居跡の状態を観察すると、壁面は、外反するが西側隅部付近では非常に残存状態が悪く、僅かに壁面が捉えられている。

床面は全体的に凹凸が激しく、軟弱な部分が多く、所謂硬い床面は認められなかった。

柱穴は、住居隅部を結ぶ対角線上の３ヶ所において確認されているが、西側隅部では確認できなかった。柱穴の深さを見ると、皆一様ではなく、床面からP_1＝38㎝，P_2＝53㎝，P_3＝65㎝と相違が認められる。

住居跡のほゞ中央部には、70㎝×40㎝ほどの不整形を呈するピットが一つ設けられている。当ピットは、床面からの深さ10～15㎝を測り、東側部分に僅かな範囲に焼土が認められ、小規模ではあるが、位置等を考慮して、本ピットは炉として機能していたものと解釈している。

住居跡に伴出した遺物は決して多いとは言えず、完形土器は１点もなく、破片の状態で土器が出土したにすぎない。住居跡出土の土器片の内、主なものを第５・６図に載せたが、これらの中で、住居跡内から出土した土器片は、５・７・９・11～14・16・17・19・21・24である。これらの土器を見ると、一部に勝坂的要素を持つ例も含まれているが、総じて阿玉台式土器の範疇として捉えられるものである。また、土器片の出土状態は、まとまりを持って出土した例はなく、いづれも住居内充満土壌中に散在的に検出されている。

住居跡内を充満する土壌堆積状態は、第４図の断面図に見るように５つの土層堆積が認められている。これらの土層は、ローム粒子を混入することを特色としているが、僅かに第５層とした最下部に堆積した土層のみ焼土粒を混入している。

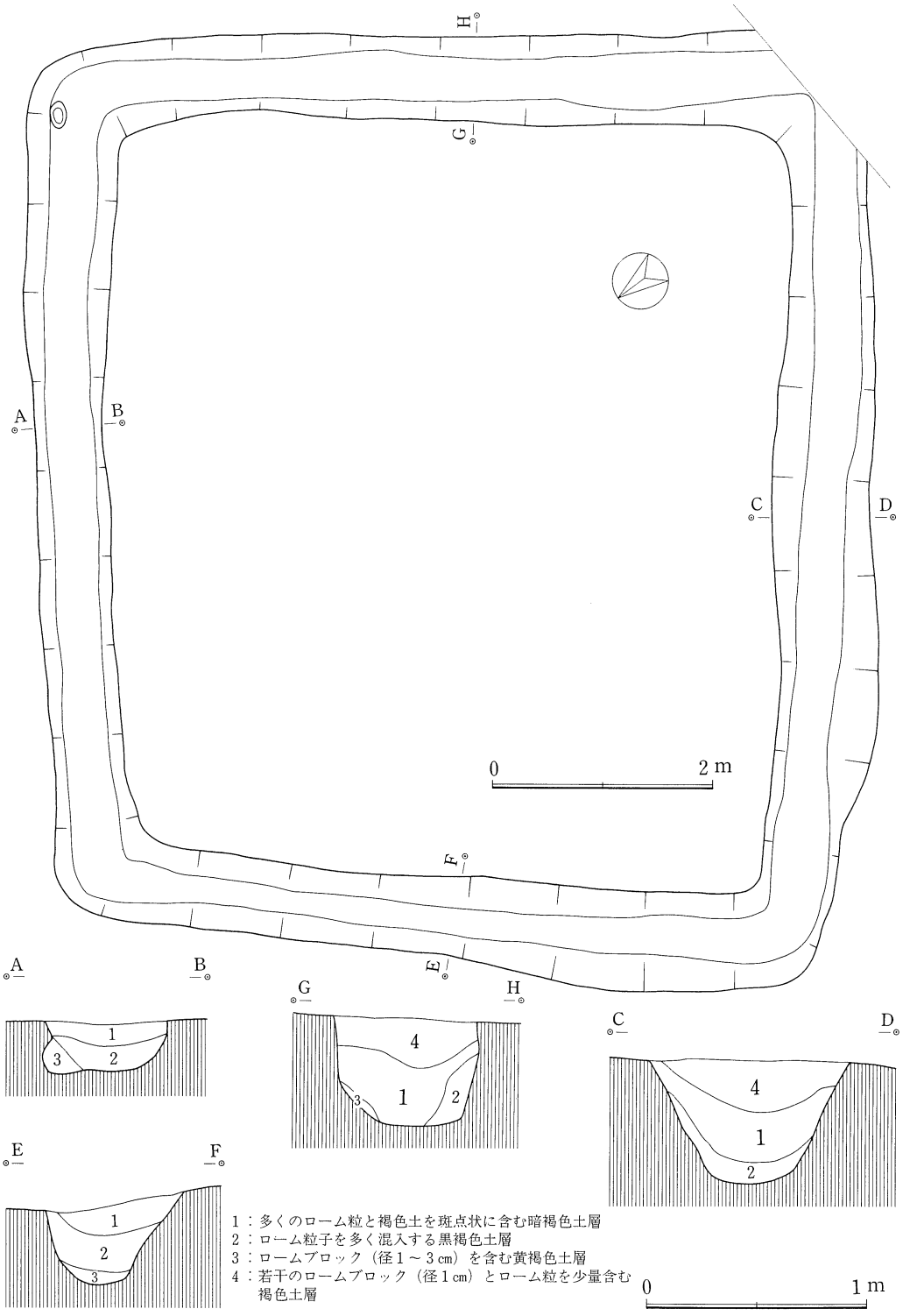
炉穴（第４図、図版１）

Ｂ25区から炉穴(008ａ・ｂ）が検出されている。当炉穴は、その西側部において住居跡と、また、中央部において溝と重複するが、これら住居跡・溝との新旧関係は、第４図の断面図を見ると、第１層から第５層が住居跡内充満土壌，第６層が溝跡内充満土壌，第７層から第10層が炉穴 008ｂ内充満土壌，第11層・第12層が炉穴 008ａ内充満土壌に分けられることから、炉穴008ａが最も古く、次いで炉穴 008ｂ，住居跡，溝跡の順に掘り込まれている。

炉穴は、 008ａ,008ｂとした如く、２基の重複によるが、008ａは、当初東西1.5mほどの大きさを持つ楕円形であったと考えられる。 008ｂは溝跡と重複するものの、全体的な形状・規模等については把握され、東西１m，南北0.7m，現存部で深さ0.3mほどを有する。

008ａ,008ｂ共に底面部に焼成を受けた痕跡が認められている。

当跡に伴出する土器等の遺物は、ほとんど見ることができなかったが、付近のグリッドなどから、第５図の拓影図に示したように、鵜ヶ島台式期の土器片が出土している点等も考慮して当 008ａ，ｂを炉穴として捉えた。


H
G
A
B
C
D
0
2 m
F
E
A
B
1
2
3
G
H
4
1
2
3
C
D
4
1
2
E
F
1
2
3
1：多くのローム粒と褐色土を斑点状に含む暗褐色土層
2：ローム粒子を多く混入する黒褐色土層
3：ロームブロック（径1～3㎝）を含む黄褐色土層
4：若干のロームブロック（径1㎝）とローム粒を少量含む褐色土層
0
1 m

第7図　方形周溝状遺構

方形周溝状遺構（第７図、図版１）

Ｂ65・66・74・75・76・77・84・85・86区に跨がった形で検出されている（第３図）。

当跡は、第７図に見るように、7.6×8.7mの大きさを有するが、一辺の長さが均一でないため、図に見るように若干の歪みを生じている。

周溝は、上面で１ｍ弱の幅を有し、底面部で20～50cmほどの幅を有している。深さは40cmから１.1mと場所により相違が見られる。また、溝の断面形状は、図中断面図に見るように、深度と同様に所により相違が認められる。なお、深さについては、本跡築造時に掘り込まれた往時の生活面が削られ残存していないため、現在見られるものより更に深度は増すものと思われる。

溝内を充満する土壌は、複雑ではなく、全体で４層に分層されたが、それぞれにローム粒あるいは径１～３cmほどのローム小ブロックを含むことが特徴的である。

出土遺物には、第５図１・３・６・８・10，第６図18・22などが伴出遺物として挙げられるが、いづれも縄文時代を所産時期とするもののみであり、方形周溝状遺構と時期を同一にする遺物は一切出土していない。

縄文土器には、図中１の夏島系土器，３の鵜ヶ島台式土器をはじめ、中期に位置づけられる土器が出土している。

溝跡（第４・８図、図版１）

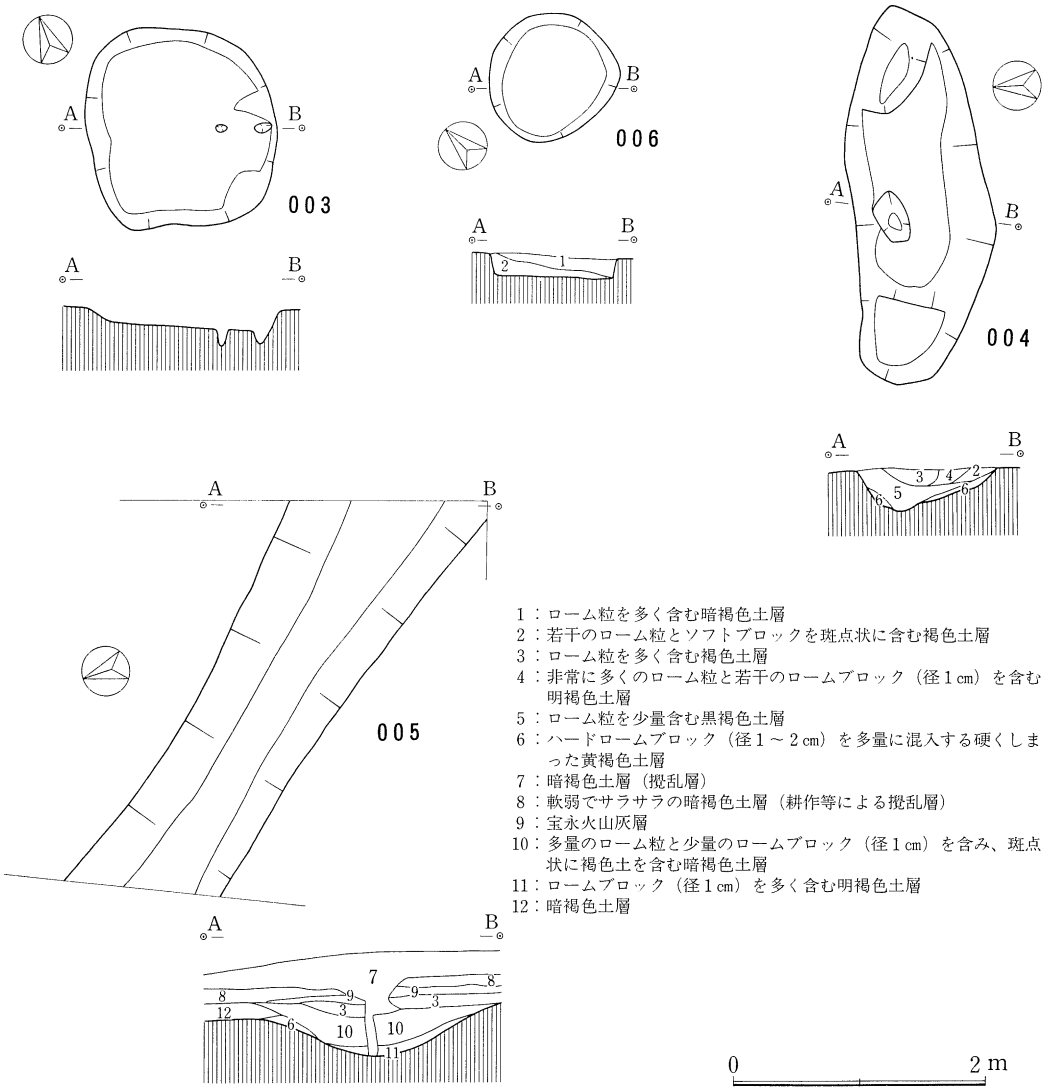
今回の調査では溝跡が２ヶ所において確認されている。一つは、前述した炉穴と重複するように南北方向に走る溝跡(007)であり、一つは、Ａ79区において検出された溝跡である。

これらに伴出する遺物の皆無なことから時期的把握を困難とさせているが、007 は炉穴との重複関係から、炉穴よりは新しい時期の所産であることは確実である。

その他の遺構（第８図）

調査区域の東側部において、３つの小竪穴状あるいは、長楕円形状の遺構が検出されている(003，004，006)。

003は、径1.5m、現在部深さ15cmほどの不整円形を呈している。伴出遺物には、第５図２・４，第６図25などの早期及び中期の土器片がある。 006は、径１ｍの円形を呈する遺構で、現存深度15cmを有する。ローム粒子を含む２つの土層堆積が認められ、第６図26の土器片が伴出している。また、 004は003・006と異なり、図示する如く、細長な不整形を呈する遺構であるが、底面部は平坦ではなく、中央部と両端部では深さ等に相違が見られる。出土遺物は第６図28が挙げられる。これら３つの遺構には、幾つかの土器片が伴出しているが、これらの土器片



第8図　その他の検出遺構

をもって遺構の時期を決定出来るかどうかは明らかではない。

小結

今回の菊間向原遺跡の調査では、調査対象区域の西側半分ほどが、斜面部であったため、遺構・遺物は、主に東側部の平坦面から検出されている。

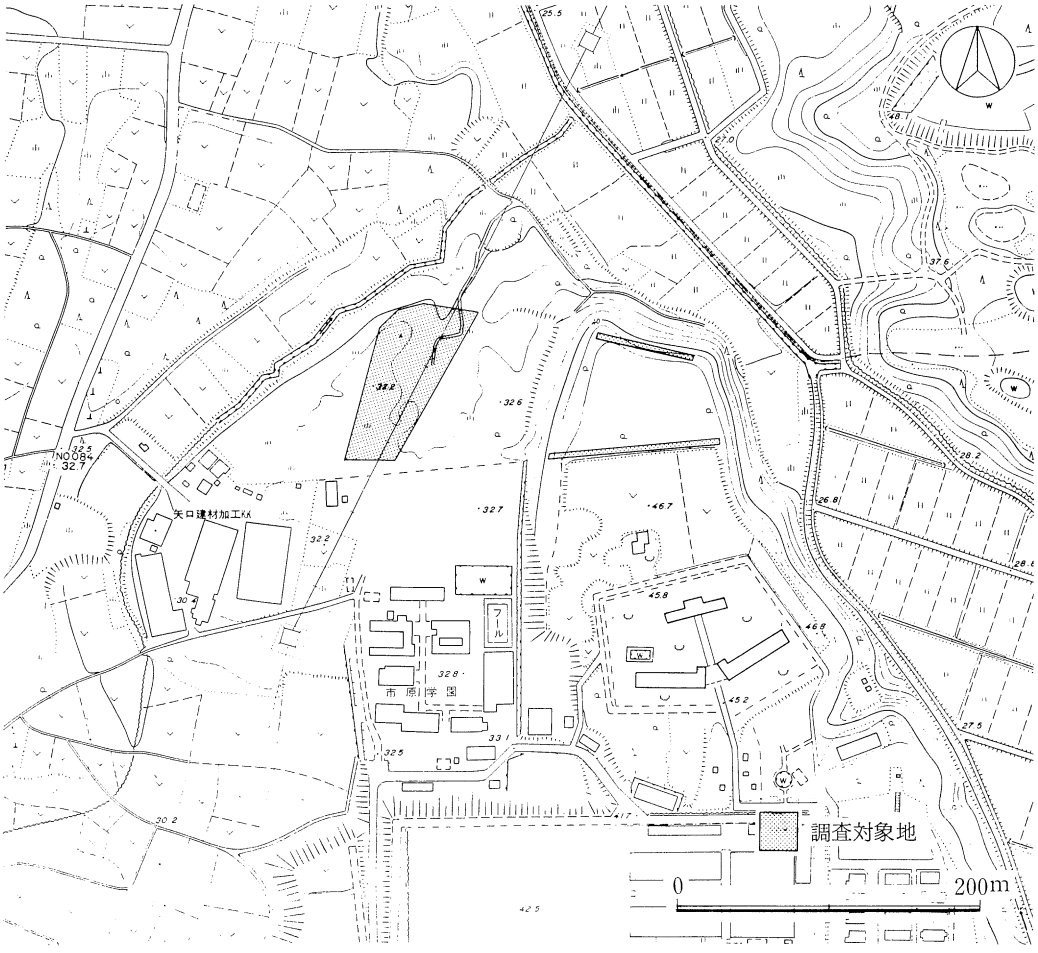
検出された遺構・遺物を見ると、縄文時代早期の炉穴，同中期の竪穴住居跡，歴史時代の所産であろう方形周溝状遺構及び円形，不整形を呈する小遺構，溝跡などの遺構と、それらに伴出して縄文時代早・中期の土器片等が見られた。出土量は少ないものの、縄文時代早期夏島式系土器をはじめ、早期末葉，中期の遺構・遺物、歴史時代の遺構の存在等、この地における人間活動の歴史復原に新たな資料を加えることができた。　　（米田耕之助）

第３章　北旭台遺跡

狭義における北旭台遺跡は、養老川中流域右岸に灌ぐ小河川の形成する、標高46m前後の舌状台地突端に位置する北旭台古墳群（A地点）と、その西側に展開する標高およそ32m前後の養老川によって形成された河岸段丘に位置する北旭台遺跡（B地点）との複合遺跡である。

調査はゴルフ練習場建設工事に伴う遺構確認調査であり、A地点に対してはフェンス建設予定地域に対して２本のトレンチを、B地点については建物建設予定地域に対して、14本のトレンチを設定した。またA地点からB地点にかけての平坦面は、ハードローム層まで達する土取の為、すでに遺構は削平されてしまったと考えられる。

検出された遺構を第１表に記す。このうち№１トレンチの７号遺構の存在する箇所は、フェンス基礎工事に際して破壊される為に、トレンチ内に検出された遺構部分を調査した。また８号・10号遺構に関しては、その性格を把握するために、それぞれ一部を調査した。



第１図　調査範囲と周辺地形図

第 2 図　地形図及び遺構分布図

第1表 北旭台遺跡検出遺構一覧表

遺構No.	性　格	時　期	備　考
1	住居跡	不　明	
2	土　壙	不　明	
3	土　壙	不　明	
4	土　壙	不　明	
5	住居跡	古墳時代？	覆土中より土師器片検出
6	風倒木		7号遺構調査時に風倒木と判明
7	住居跡	縄文時代	早期条痕文系土器　一部調査
8 A	古　墳	古墳時代	円墳　墳丘残存　周溝一部調査
8 B	炉　穴	縄文時代	一部調査
9	溝	不　明	
10	住居跡	弥生時代	一部調査
11	溝	不　明	
12	住居跡？	不　明	
13	土　壙	不　明	
14	土　壙	不　明	
15	土　壙	不　明	
16	溝	不　明	
17	溝	不　明	No.14トレンチ部は攪乱により検出されていない。
18	住居跡？	不　明	
19	溝	不　明	
20	溝	不　明	
21	溝	不　明	
22	土　壙	不　明	

7号遺構（住居跡）（第3図、図版4）

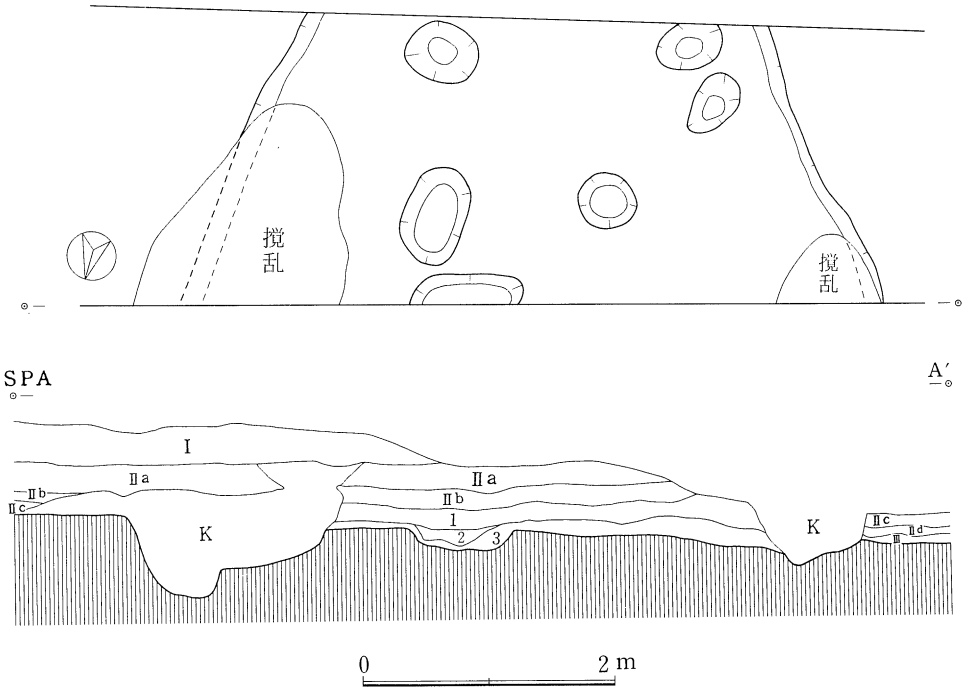
No.1トレンチ西端よりおよそ30mの地点で検出された。確認されたプランから推定して、北東方向の一辺が南西方向の一辺より短い長台形を呈しているものと推定される。北側トレンチ壁面際に2ヶ所の攪乱があり、遺構の掘り込まれた層位はやや不明であるが、上層に基本土層IIb層が検出されていることから、IIc層を掘り込んで構築されたものと考えられる。検出面からの掘り込みは浅く、深さ約20cm前後を測る。床面は全体的に軟弱であるが、計6箇所のピットが確認されており、深さは床面よりそれぞれ20cm前後を測る。比較的遺存状況の良好だった箇所の壁の立ち上りは、やや急激である。（木對和紀）

縄文土器（第4図、図版5）

第7号遺構に伴出した土器を第4図としてまとめた。図を一見しても明らかなように、すべて破片の状態で出土したもので、全体の形状・規模等を把握し得る例は出土していない。しかし、部位的には、口縁部片，胴部片，底部片などの各部位破片が見られる。

これらの土器片は、住居跡充満土壌中に散在的に出土したもので、床面上にまとまりを持って検出された例等は見られなかった。

第4図1～3・9は、おそらく同一個体と思われる土器破片である。他の土器とは異なり、隆起帯の貼付文を有することが最大の特色となる土器である。隆起帯の上には、竹管上の工具を用いて幅5mmほどの太い刻目を施し文様を作り出している。また、同様の手法により(1)に見るように口唇部上に刻目を施文している。地文には条痕文を横位に施している。条痕文は、表面よりも裏面に顕著に見られるものである。色調は土器表面は白っぽいが、胎土は黒く繊維の



I　：黒褐色　現表土
IIa：極暗褐色　有機質土層
IIb：茶褐色　新規テフラ層
IIc：極暗褐色　有機質土層
IId：暗褐色　ローム漸移層
III　：褐色　ソフトローム層

1．暗褐色　ローム粒若干含むやや締り強
2．暗褐色　有機質性が非常に強く色調は黒色に近い
3．暗褐色　ローム粒やや多く含む

第3図　7号遺構

混入が著しい。

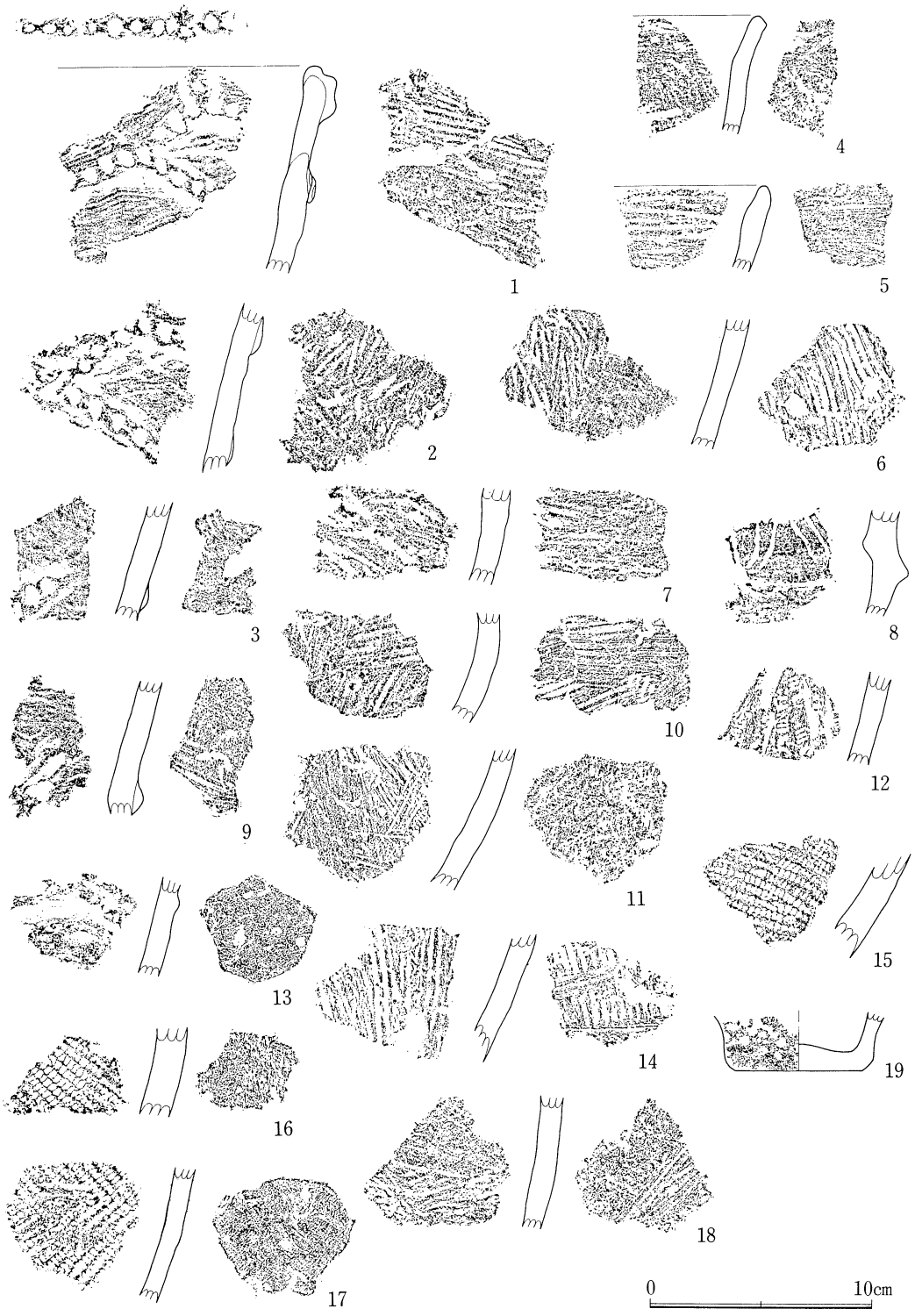
4～7・10・11・14・18は、表裏面に条痕が施文された土器群である。4・5が口縁部破片である他は、いづれも胴部破片である。条痕文は縦方向を基調とするが、口縁部では横走し、斜方向に走るものも見られる。いづれも繊維を混入する。

同様に繊維混入の土器として12・13があるが、これら2点の土器片は、幅3㎜ほどの隆起帯を貼り付け文様を構成する土器である。

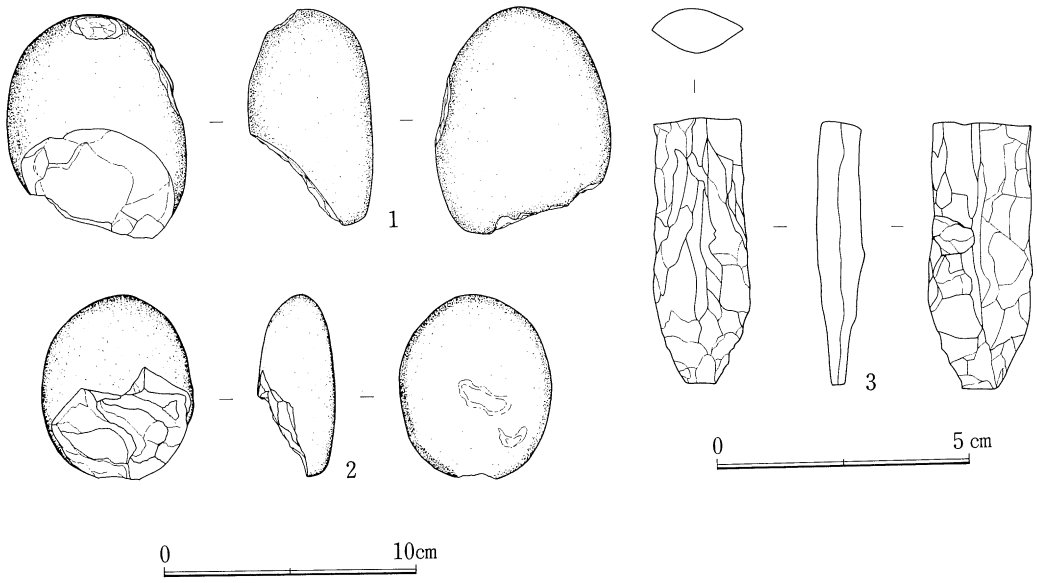
8は、淡橙色を呈し、胎土中に雲母片・白微石を混入することが特徴的な阿玉台式土器の破片である。横位の隆帯を設け、それより上部に連続刺突による沈線を施文している。

15～17・19は、斜縄文を施文する一群の土器で、胎土中には繊維を混入しており、前期初頭の所産時期が与えられるものであろう。以上のように早期終末期土器が主体を占めることから、第7号住居跡を早期終末期の住居跡として捉えておきたいと思う。　（米田耕之助）

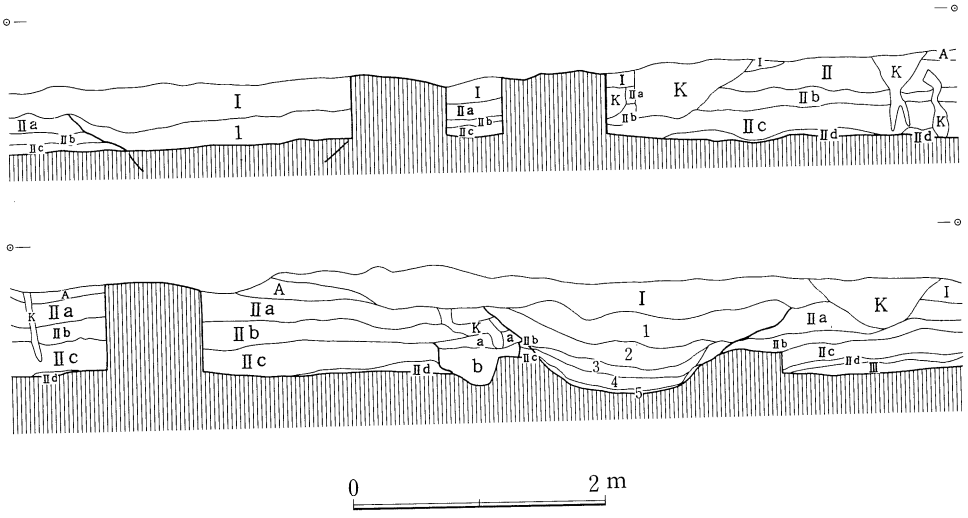
石器（第5図、図版5）



第 4 図　第 7 号遺構出土遺物(1)



第5図　7号遺構出土遺物(2)

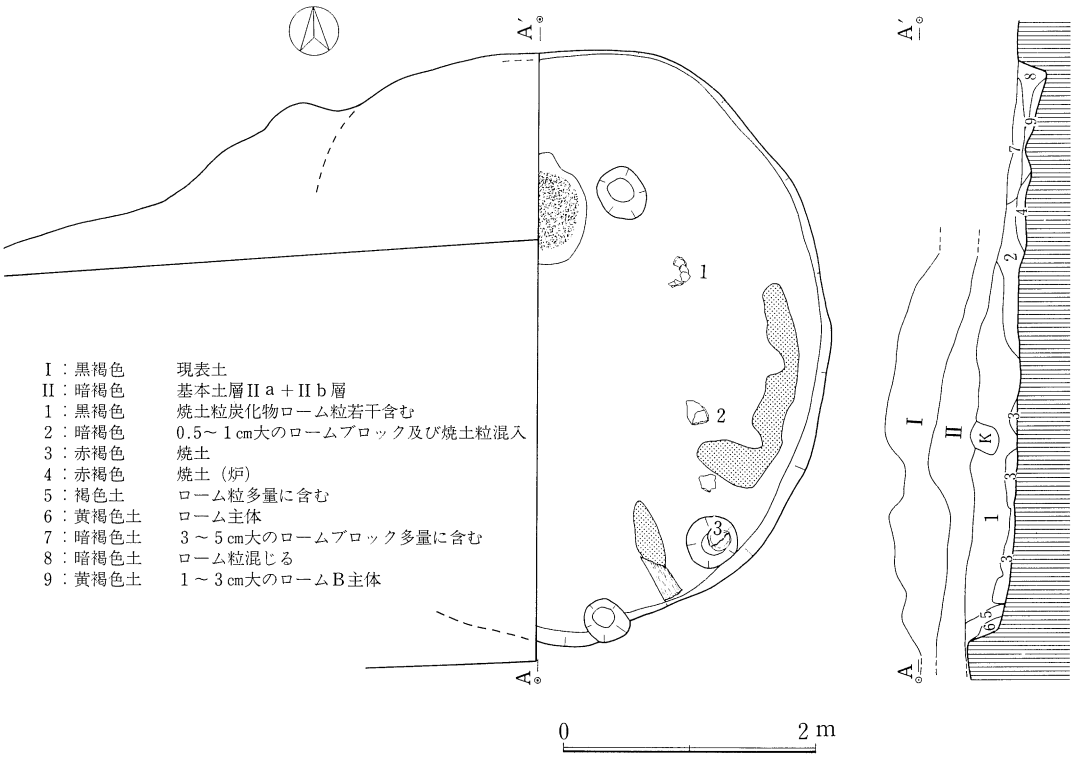


Ⅰ	：黒褐色	現表土	基本土層
Ⅱa	：極暗褐色	有機質土層	基本土層
Ⅱb	：茶褐色	新規テフラ層	基本土層
Ⅱc	：極暗褐色	有機質土層	基本土層
Ⅱd	：暗褐色	ローム漸移層	基本土層
Ⅲ	：褐色	ソフトローム層	基本土層

A	：茶褐色	ローム粒を多量に含む古墳盛土	古墳
1	：黒褐色	暗褐色土を斑点状に含む黒色有機質土	古墳
2	：黒褐色	1層よりも締りある黒色有機質土	古墳
3	：暗褐色	有機質土の影響を強く受けるが若干の新規テフラ崩壊土含む	古墳
4	：暗褐色	ローム粒やや多く含み、若干締る	古墳
5	：褐　色	ローム粒ロームブロックを多量に含み締り弱い	古墳
6	：暗褐色	新規テフラ崩壊土を多量に含む	古墳

a：暗褐色　新規テフラ崩壊土を斑点状に含む
b：暗褐色　焼土粒少量含みやや締る

第6図　8号（A・B）遺構



第7図　10号遺構

第7号遺構（住居跡）に伴出した石器を第5図にまとめた。1は磨石から敲き石へと用途が変化している。二次加熱を受けているが、打面に加熱を受けた痕跡がなく、磨石としての用途終了後に加熱を受けたことが観察される。2は磨石から敲き台へと用途が変化したことが観察されるが、長時間使用された痕跡がなく、おそらく1回程度の使用と考えられる。3は有舌尖頭器と推定されるが、先端部と基部は失われている。これらの石器はいずれも覆土中に散在的に存在した状態で出土したものであり、床面にまとまって検出されたものではない。

8 A号遺構（古墳）（第6図）

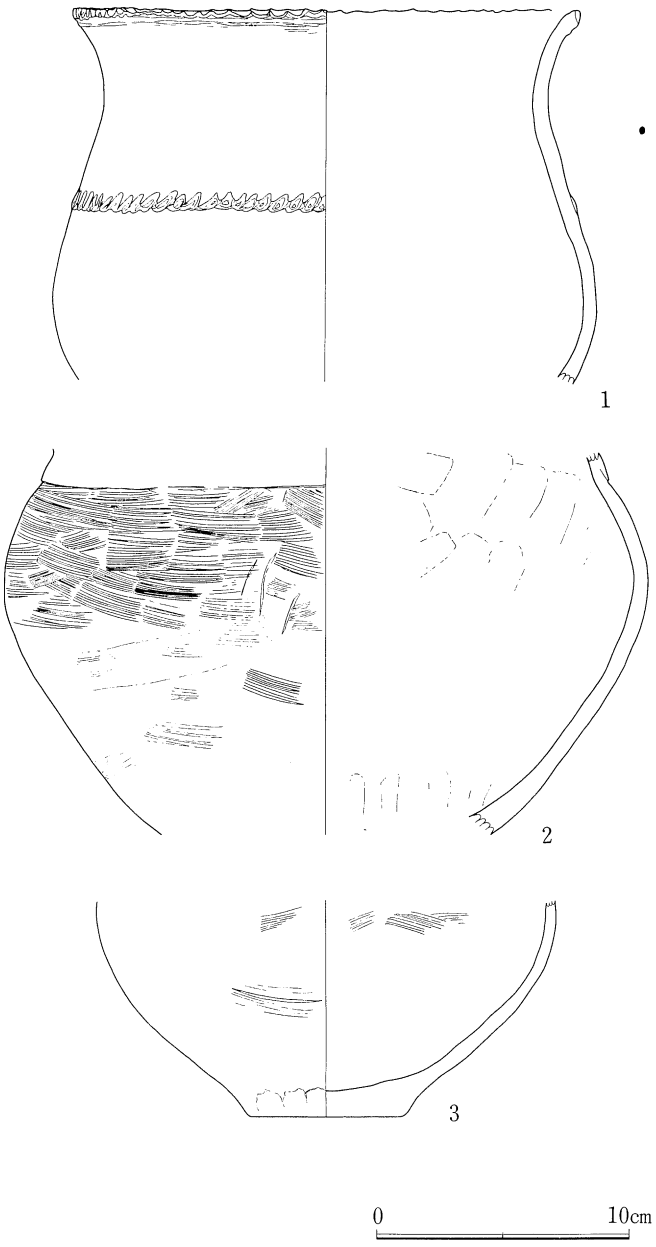
No.1トレンチ西端より3.5m・19.5mの地点でそれぞれ周溝が検出された。墳丘は現在でも残存しており、第2図のコンターの高まりでも観察される。確認された周溝より判断して、円墳と推定される。封土は、旧表土と考えられるIIａ層に直接盛土されており、周溝と盛土の間は、テラス部分となっていたのか、盛土は検出されていない。断面図による構築時の周溝の規模は、幅2.42m，深さ64㎝前後を測る。検出された周溝間の規模より、周溝外縁径18m前後の規模をもつ円墳と考えられる。

8 B号遺構（炉穴）（第6図図示ａｂ層）

No.1トレンチ西端よりおよそ18.3m、8A号遺構周溝間に検出されている。第7図に示す土層断面図によれば(a,b) 8A号遺構（古墳）の東側周溝によって切られており、覆土に焼土粒を多く含んでいることから、縄文時代の炉穴と推定される。また、確認された平面プランはややいびつであり、2基程度の炉穴が重複しているものと推定される。

10号遺構（住居跡)(第8図、図版4)

No.6・7トレンチ中間の拡張部において検出されている。遺構の約半分を調査しており、A～A′間の規模は4.66m，確認面からの深さは40cm前後を測る。床面直上には、壁際にそって焼土・炭化物が堆積していた。床面はよく踏み堅められており、炉は中央北側に設けられている。ピットは計3本検出されており、深さは床面よりそれぞれ20cm前後を測る。掘り込みはしっかりしており、壁は急激に立ち上っている。



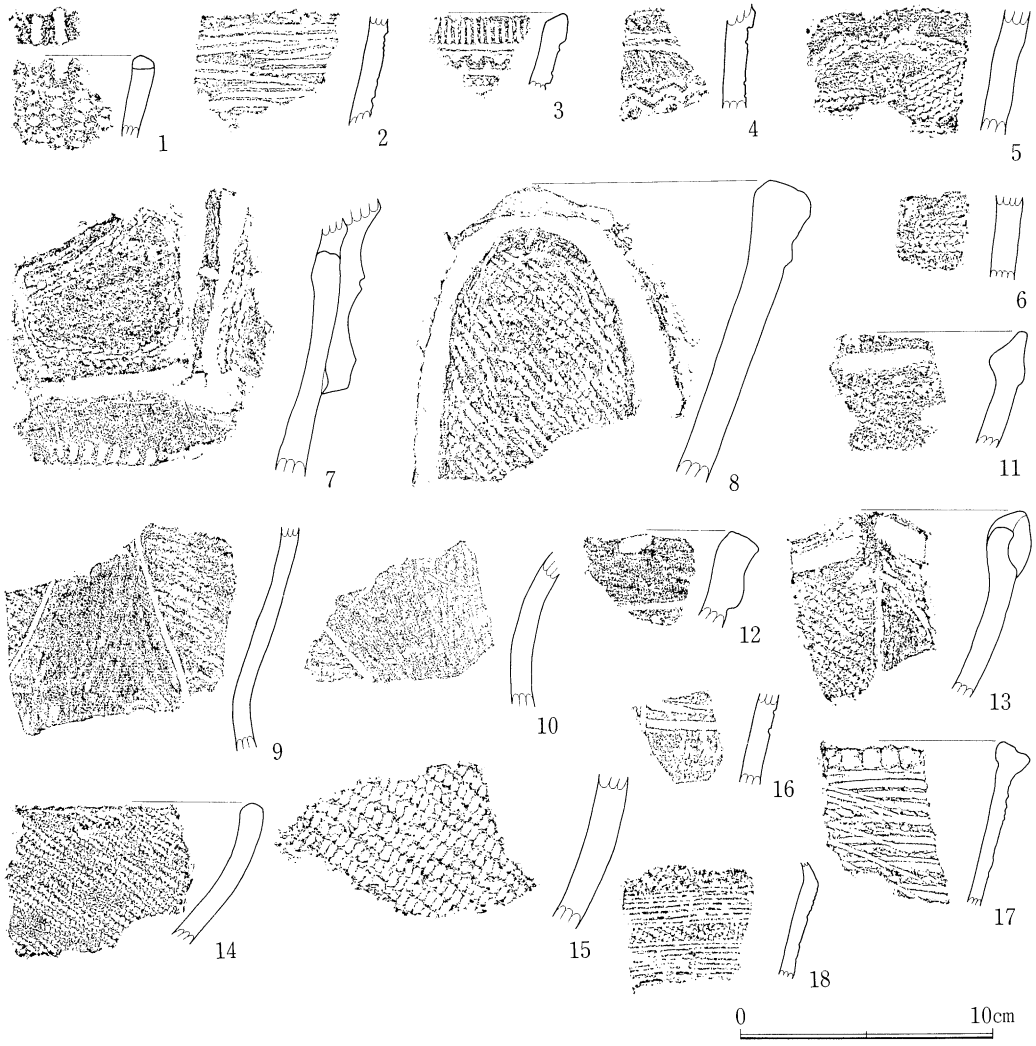
第8図　10号遺構出土遺物

遺物（第9図、図版5）

3点の図示可能な遺物が出土している。いずれも甕形土器であり、1・2は床密着の状態で、3はピット底面より約10cm程浮いた状態で検出されており、いずれも本遺構に伴うものと考えられる。　（木對和紀）

第2表 10号遺構出土遺物観察表

図番	器種	遺存度	口径(cm)	底径(cm)	残存高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	全体の¼	2.00	—	14.7	黒色及び石英の微砂粒を多量に含む	良好	茶褐色	口縁部指頭押捺の波状文 胴部キザミ状の刺突による波状文 外面ヘラ状工具による整形後、横方向のナデ
2	甕	胴部 ½	—	—	15.3	白色の微砂粒、石英粒を多量に含む	良好	(外) 暗褐色 (内) 茶褐色	外面ハケ状工具による整形後ナデ 胴下位はほとんどハケ目が消えかかっている。 内面、ヘラナデ
3	甕	胴部～底部 ¼	—	6.0	8.5	白色、褐色の微砂粒及び石英の微砂粒多量に含む	良	暗褐色	ハケ状工具による整形後ナデの為内外面のハケ目はほとんど消えている。



第9図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第９図、図版５）

各トレンチ内から出土した土器の内、主なものを第９図としてまとめて掲載した。

全体的に出土量は多くないが、時期的には、縄文時代早期から後期に至る各時期の土器が出土している。

第９図に掲げた土器について瞥見すると、１は、竹管を刺突することによって作られた文様により器面を充塡し、口唇部に幅５㎜ほどの沈線状の刻目を持つことを特徴とする土器で、白微石の混入が多くザラザラした感じの口縁部破片である。２は、横走する条痕を施文することから茅山式系土器と考えたが、裏面に条痕文の皆無なこと、繊維の混入されないこと等考慮すると、晩期末に伴う条痕文系土器の可能性が高い。５・６は、撚糸を綾杉状に施文することが特徴となる土器で、表面は赤橙色を呈している。黒浜式期に伴う土器と思われる。

３は、口縁部小片ではあるが、文様が良く見てとれ中期前葉に、また、他の多くも中期中葉から後葉として捉えられる土器であろう。４・７は、雲母片を混入し、半截竹管により、平行沈線あるいは刺突文を加えることが特色となる阿玉台式土器に比定され、８～13は、磨消縄文により文様を作り出すことが特徴的な土器群で、中期末葉に位置付けられる土器である。14・15は共に縄文のみを器面に充塡する土器である。16は、直線的な沈線文を主とするため、後期の土器と考えたが、刺突状の文様がわずかに見られることから、前期浮島系の土器である可能性が高い。17は、加曽利Ｂ式土器として、18は、横走する集合沈線と縄文の組み合せによる文様構成を有する土器で、諸磯式あるいは宮ノ台式期に比定され得ると思われるが、所属時期は明らかではない。（米田耕之助）

小結

磯ヶ谷地区周辺の遺跡は、これまでにほとんど調査が行われておらず、不明な点も多かった。今回確認調査とはいえ、縄文・弥生・古墳時代の各期の遺構を検出することができ、この地域における生活様式の一端を垣間見ることができたことは大きな成果と思われる。また第２図を見ると、今回報告した遺構の外にも古墳と思われる高まりが調査範囲の内外にも認められ、今後この地域の調査には十分な注意が必要となるであろう。

検出された遺構・遺物について若干の考察を加えるならば、７号遺構（住居跡）より検出された遺物は、縄文早期の条痕文系土器がその主流を占めており、当期にその時期を求めることができるものと考えられる。また10号遺構（住居跡）は、床密着の状態で検出された遺物より久ヶ原期に比定されよう。その他に検出された遺構については、そのほとんどが全掘されておらず、時期の確定は困難である。

今後この地域の調査が増し、新たな資料が得られることにより、その全貌がより明瞭になるものと考えられる。（木對和紀）

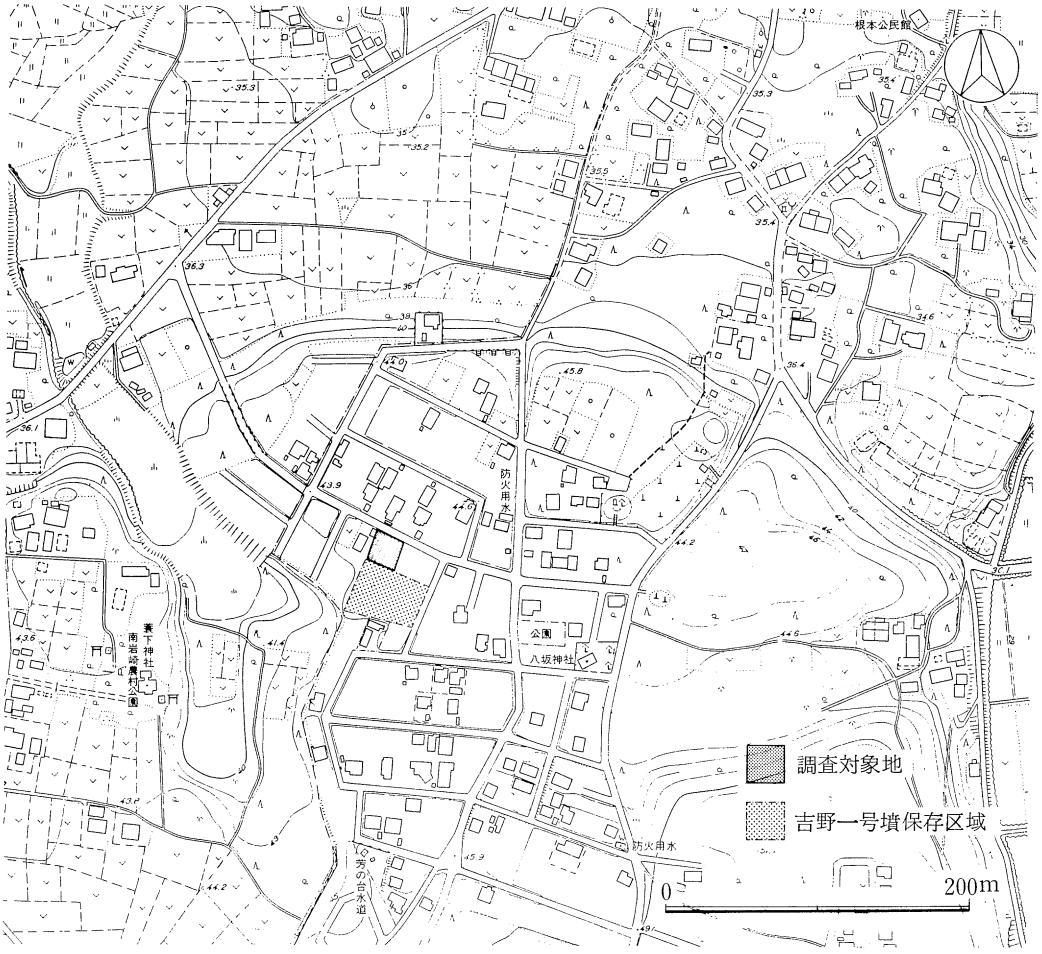
第 4 章　吉野１号墳・南岩崎吉野遺跡

調査は、吉野１号墳の前方部の北側、くびれ部から北西コーナー付近の 446㎡について行った。吉野１号墳は約50基からなる吉野古墳群に属し、周溝の一部を除き、市指定史跡として住宅地内に今日でも現状保存されている。

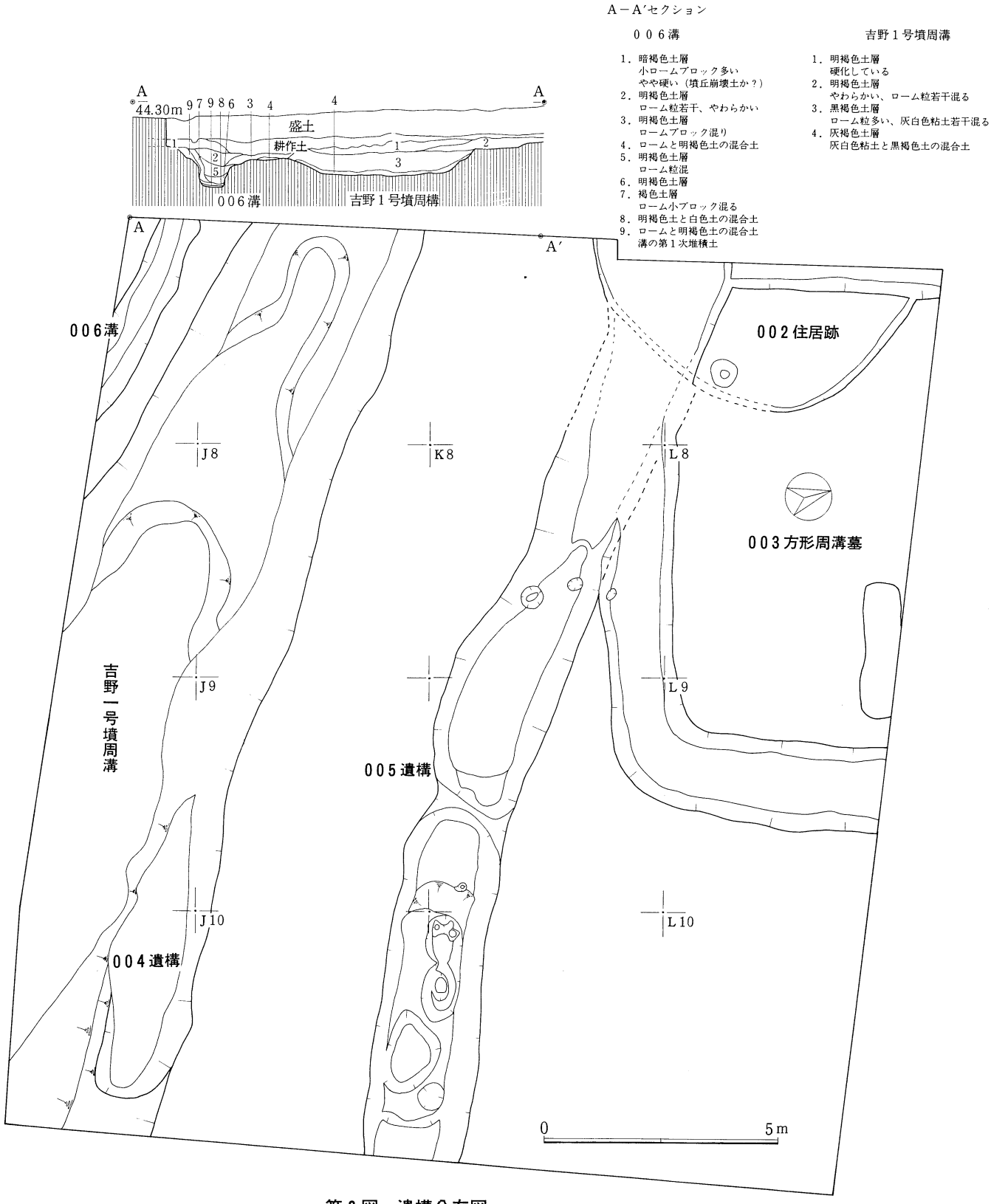
調査は、吉野１号墳の主軸線を基準に５ｍ方眼のグリッドを設定し行い、グリッド名称は、各南西の杭に付与している。

1　遺　構

検出された遺構は、吉野１号墳の周溝以外に、住居跡，方形周溝墓などであるが、ローム層上面まで攪乱を受けており、旧耕作土上には砂などを混える盛土がされていた。



第１図　調査範囲と周辺地形図


A－A′セクション
006溝
1．暗褐色土層
小ロームブロック多い
やや硬い（墳丘崩壊土か？）
2．明褐色土層
ローム粒若干、やわらかい
3．明褐色土層
ロームブロック混り
4．ロームと明褐色土の混合土
5．明褐色土層
ローム粒混
6．明褐色土層
7．褐色土層
ローム小ブロック混る
8．明褐色土と白色土の混合土
9．ロームと明褐色土の混合土
溝の第1次堆積土
吉野1号墳周溝
1．明褐色土層
硬化している
2．明褐色土層
やわらかい、ローム粒若干混る
3．黒褐色土層
ローム粒多い、灰白色粘土若干混る
4．灰褐色土層
灰白色粘土と黒褐色土の混合土
A
44.30m
9 7 9 8 6 3 4
4
A
盛土
耕作土
1
2
5
1
2
3
006溝
吉野1号墳周構
A
A′
006溝
002住居跡
J8
K8
L8
003方形周溝墓
吉野一号墳周溝
J9
L9
005遺構
J10
L10
004遺構
0
5m

第2図　遺構分布図

吉野１号墳（付図、第２図、図版６）

調査は、主に周溝の一部についてを行ったのみであるが、その結果、前方部の北西コーナー付近が僅かに確認する事ができた。周溝の規模は、幅約3.5mから4.5m、ロームの掘り込みは、約40cmから90cmである。墳丘部分は、後世の攪乱及び 006溝により旧表土、封土は残存していない。周溝は、くびれ部付近が最も深く掘られており、周溝中央部では緩やかな傾斜をもつが、古墳外側及び墳丘にかけては比較的急角度で立ち上がる。底面は灰白色粘土層である。

遺物は、周溝中からは小破片が主であるが、かなりの量の埴輪片が出土している。中には形象埴輪と考えられるものも見られるが、全体の形状などは不明である。また、小量ながら須恵器片も出土している。これらの埴輪の突帯の様相、そして、少量ながら須恵器などを考慮すると、６世紀代後半の時期に比定できるであろう。

墳丘規模については、未だ不充分な調査範囲であるが、現段階では、主軸長約52m、後円部径約31m前後、主軸線と調査区域を考慮すると前方部幅約42m、後円部高約 3.8m、前方部高約4.2mの、２段築成であると考えられる。

００２住居跡（第３図、図版７）

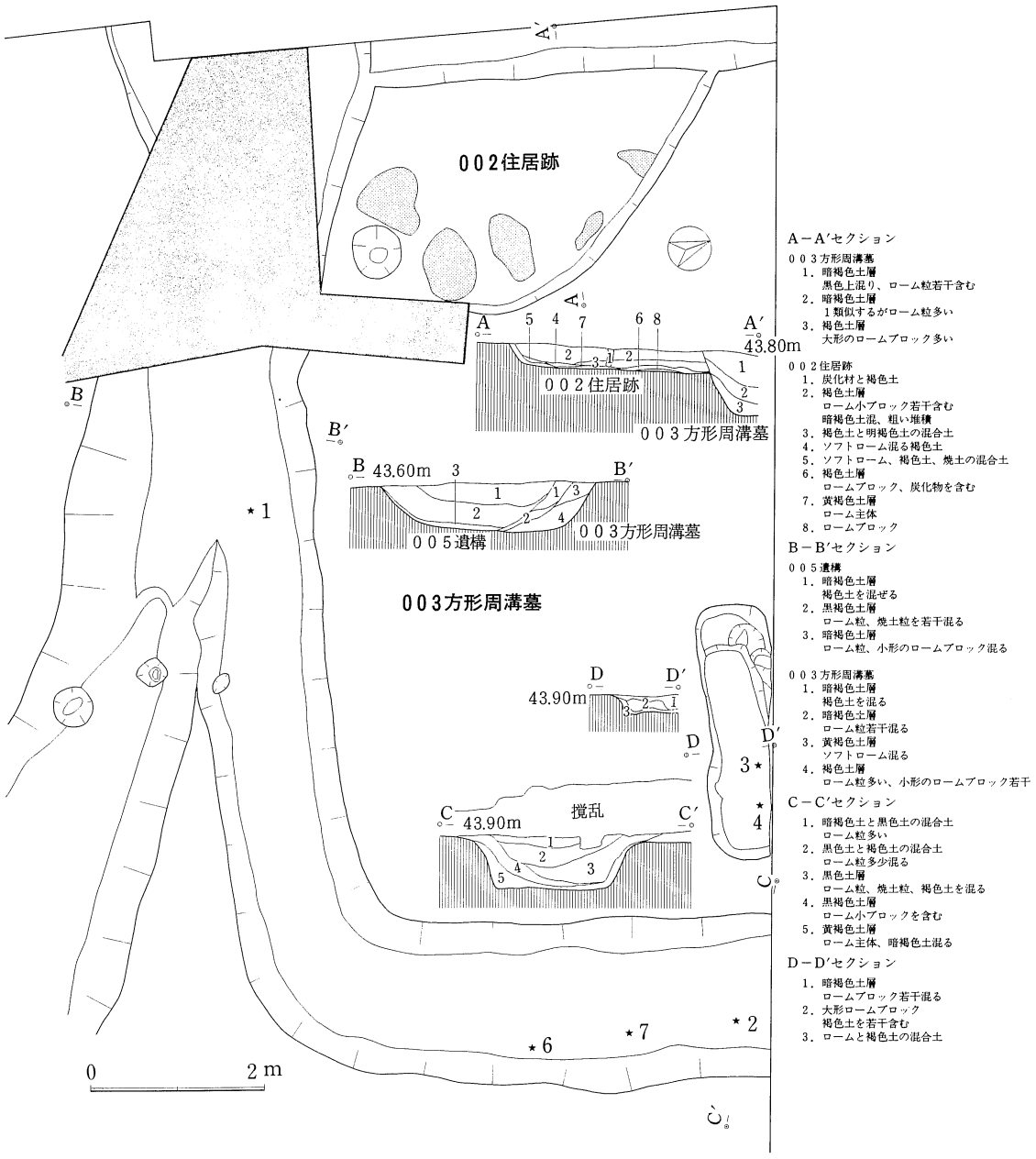
調査区域の北西隅に検出され、西側のほぼ半分以上が区域外に延び、更に、攪乱，方形周溝墓の影響により、残存しているのは極めて一部である。おそらく一辺約 3.3mの隅丸方形プランを呈すると考えられる。炉跡及び柱穴などの施設は検出できず、遺物は、床面直上から高坏のミニチュア土器が出土し、覆土中には５個所に焼土が廃棄されていた。出土した土器から、古墳時代前期に属するものである。なお、方形周溝墓との新旧関係は、本住居跡の方が古い時期の所産である。

００３方形周溝墓（第３図、図版８・９）

北側の約半分と西側の一部が調査区域外の為、全容は不明である。また、南西部で新しい時期の005遺構と重複しているが、確認できた部分から外辺約13.5m，内辺約9.5mと推定される。周溝は、幅約 1.5mから 2.0m、ローム掘り込み約60cmである。主体部は、東側周溝に偏して確認されたが、北側の一部については調査できなかった。長軸線をほぼ東西にもち、長辺2.95m，短辺約 0.9mの、隅丸長方形プランを呈する。遺物は、主体部から台付甕が２点，底面から約15cm程高い位置で出土し、また、周溝からは壺が内側から流れ落ちた状態で、さらに東側周溝中央付近で器台が２点出土している。いずれも底面から30cmから40cm高い位置である。これらの土器から、やはり古墳時代前期に属するものものである。

００４・００５遺構（第４図、図版７・９）

004遺構は吉野１号墳の周溝と重複しており、周溝を掘り下げた結果検出できたものである。周溝と重複の為、規模などについては明確ではないが、005遺構と同質のもので、2基の遺構



第3図　002住居跡・003方形周溝墓

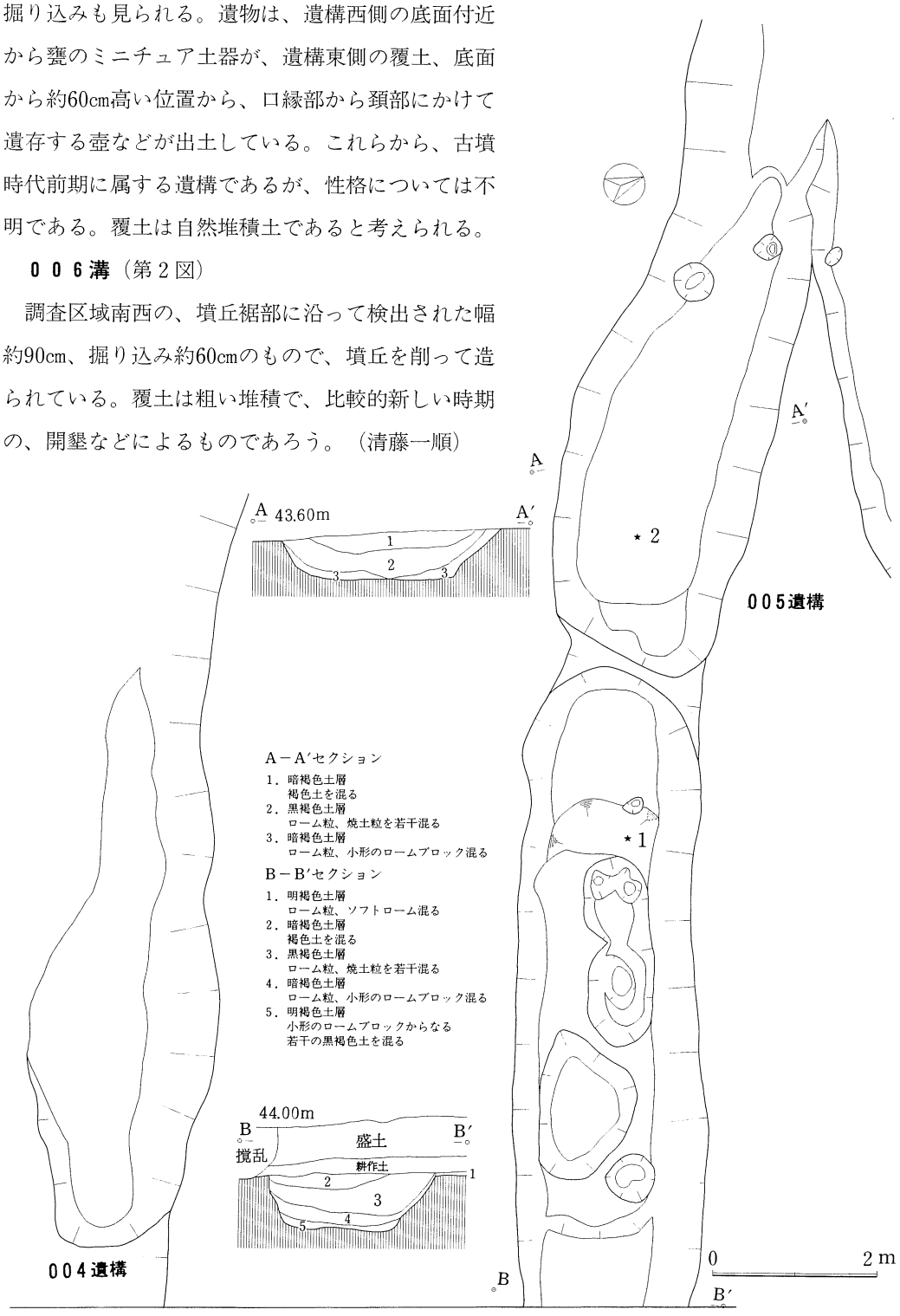
は平行に近い状態で築かれていたと考えられる。周溝中から甕，高坏などの五領式土器が出土しているが、本来この遺構に伴っていた可能性もある。

005遺構は、長軸が8m以上、短軸約2.5mの土壙ないしは溝が連なっている状態がK9杭の西側で伺える。これらが同時期或いは異なる時期のものかは明瞭ではないが、ここでは前者と考える。ロームの掘り込みは約70cm前後で、底面はほぼ平坦であるが部分的に小ピット，浅い

掘り込みも見られる。遺物は、遺構西側の底面付近から甕のミニチュア土器が、遺構東側の覆土、底面から約60cm高い位置から、口縁部から頸部にかけて遺存する壺などが出土している。これらから、古墳時代前期に属する遺構であるが、性格については不明である。覆土は自然堆積土であると考えられる。

００６溝（第２図）

調査区域南西の、墳丘裾部に沿って検出された幅約90cm、掘り込み約60cmのもので、墳丘を削って造られている。覆土は粗い堆積で、比較的新しい時期の、開墾などによるものであろう。（清藤一順）



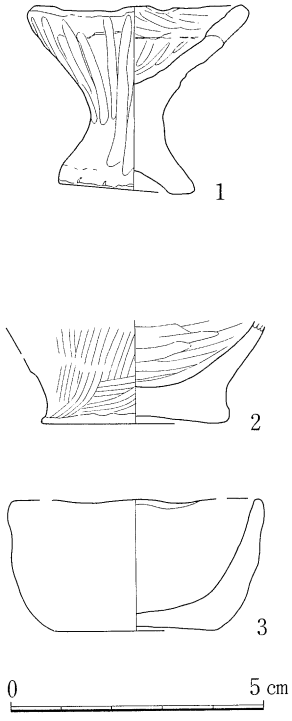
第４図　００４・００５遺構

2　遺　物

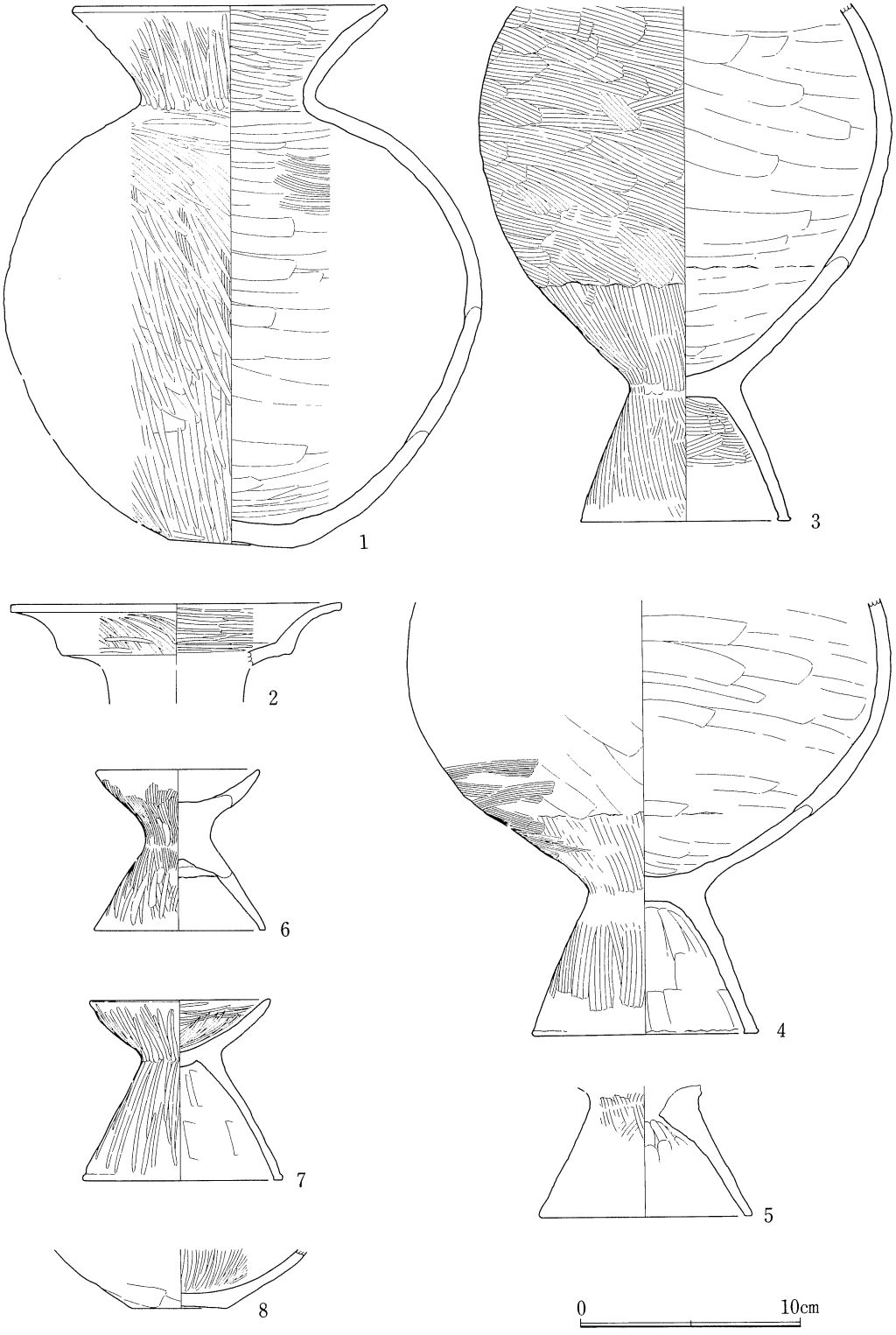
弥生土器・土師器（第５～９図、図版10）

００２住居跡（第５図－１）　図示し得るものとしては、ミニチュアの高杯形土器一点のみである。脚端部が一部欠損している。口径4.4cm、器高3.5cmを測る。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内外面とも、ナデ調整ののち、ヘラナデ状のミガキを施す。

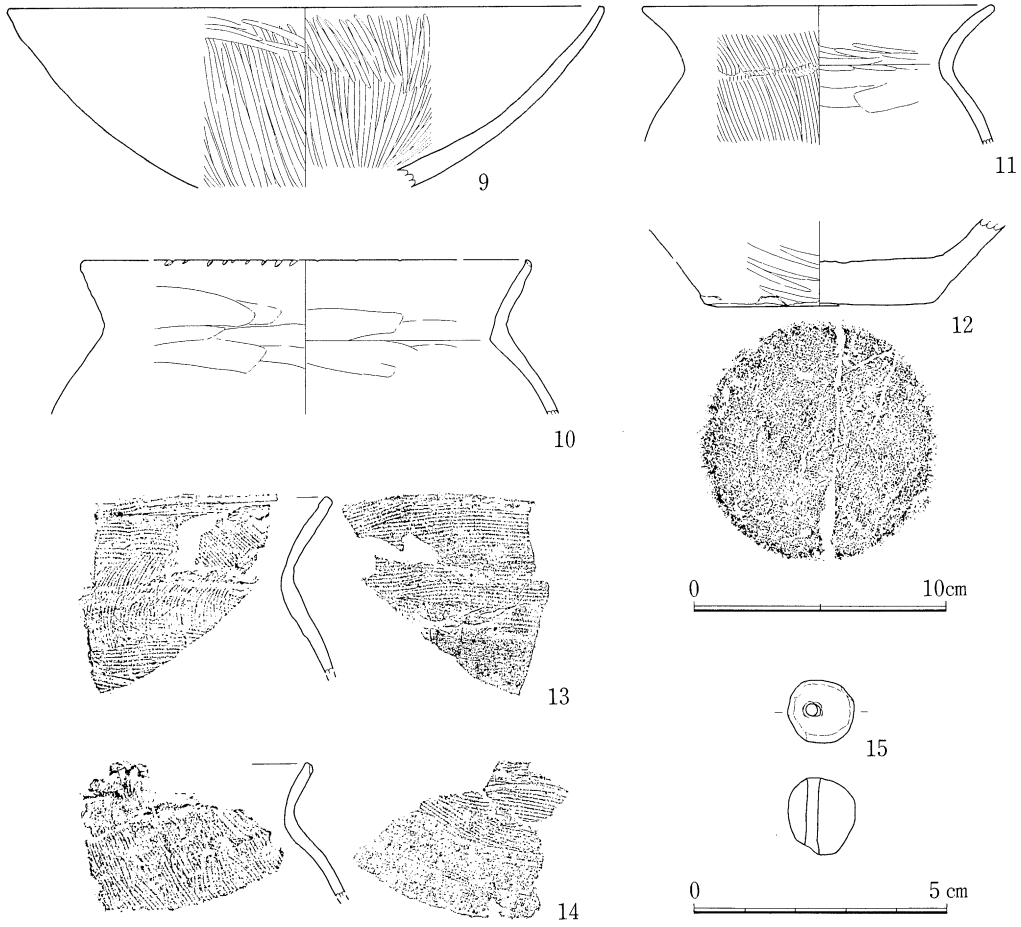
００３方形周溝墓（第６・７図）　第６図－１は壺形土器である。胴部1/4程度欠損しているが、穿孔痕は明確ではない。口径14.2cm、器高24.3cmを測る。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。外面調整方法は、ハケ整形ののち胴部下半にヘラケズリ、さらに全体に粗いミガキを施す。口縁部内面は、ヘラナデののち端部にヨコナデ、さらに横方向のミガキを施す。胴部内面は、横方向のヘラナデを基調とし、上半部局部的にハケがみられる。第６図－２は、壺形土器複合口縁部である。複合部上半１/8程度遺存している。内外面ともナデ調整ののちミガキを施す。第6図－３・４の甕形土器は、主体部より出土したものである。３は口縁部から胴部上半1/3が欠損する。現存高23.3cm、脚部径 9.5cmを測る。胴部最大径は18.7cmであり、やや長胴の器形をとる。器面色調は暗茶褐色～褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に赤色酸化粒を多量に含む。外面の調整はハケ整形であり、調整方向は、胴部下半、脚台部が接合部より上下に、また胴部上半は正面右下より斜方向に施す。また胴部下半粘土紐積み上げ休止部に対しては、再調整を加えている。胴部内面はヘラナデ、脚台部はハケ整形ののち下半部はヨコナデを施す。４は口縁部から胴部約½を欠損する。現在高19.7cm、脚部径10.2cmを測る。器面色調は褐色を基調とし、外面黒褐色を呈す。焼成は良好である。器面調整は、脚台部から胴部下半外面が浅いハケ整形、胴部上半は平滑なナデである。胴部下半粘土紐積み上げ休止部に対しては、施工具の異なるハケ整形を局部的に加えている。内面は横方向のヘラナデによる。第６図－５は台付甕形土器脚台部である。現存高は 5.9cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、外面はハケ、内面は指ナデを基調とし、端部にヨコナデを加える。第6図－6・７は器台形土器である。両者とも器受部貫通孔，脚部透孔を欠き、また赤彩も認められない。６は脚部2/3を欠損する。器受部径7.4cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。また胎土は７とは異なり赤色酸化粒を多量に混合する。整形は中央粘土塊から上下に粘土紐を積み上げる。外面の調整はハケ整形ののち器受部，脚部端部をヨコナデ、また体部には局部的にナデ状のミガキを加



第５図　ミニチュア土器



第6図　003方形周溝墓出土弥生土器・土師器



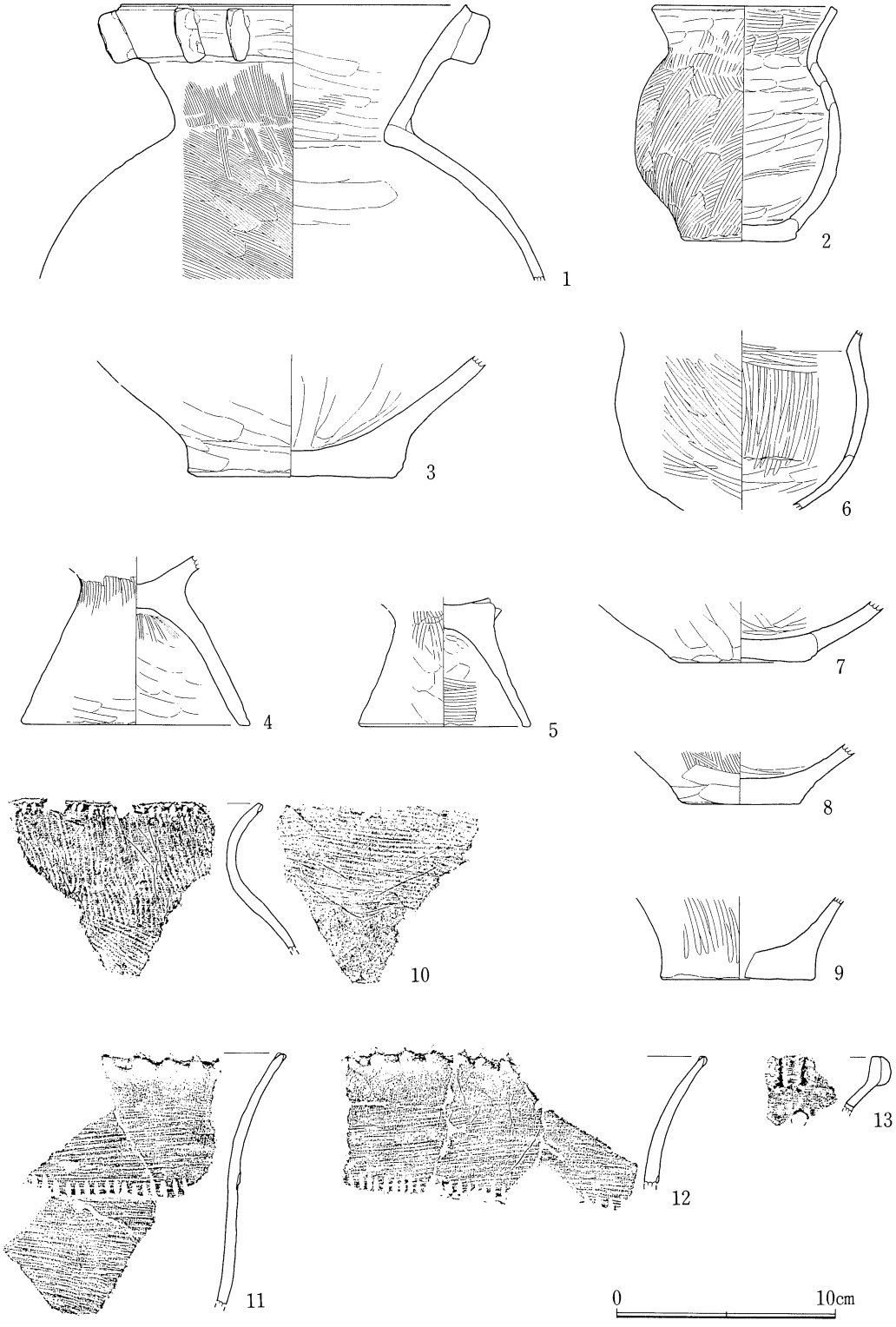
第７図　００３方形周溝墓出土弥生土器・土師器・土玉

える。器受部内面はヘラナデののちヨコナデ、脚部はナデ調整を施す。7は脚部1/2を欠損する。器受部径8.2cm、器高8.2cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面外面の調整は、ナデ状の目の細く浅いハケののち、粗いミガキを加える。器受部内面はナデののちミガキ、脚部内面はヘラナデである。第６図－８は主体部から出土したものであり、椀形土器と考えられる。底部のみ遺存している。現存高は2.７cmを測る。器面色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。外面は平滑なナデ、内面はヘラナデののちミガキを加える。第７図－９は、高杯形土器である。杯部約1/6が遺存している。杯部口径23.6cm、現存高7.1cmを測る。器面色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。調整方法は、内外面ともナデののちミガキを施す。第７図－10は、甕形土器であり、口縁部1/8を遺存する。口径は17.9cm、現存高は6.1cmを測る。器面は褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、内外面ともヘラナデを基調とし、端部にヨコナデを加える。口唇部刻目はヘラ先による。第7図－11は甕形土器であり、口縁部1/6を遺存する。口径14.0cm、現存高５.4cmを測る。器面色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、

外面はハケ整形ののち口唇部にヨコナデを施す。口縁部内面は、ヘラナデののちヨコナデ，ミガキを施す。胴部上半はヘラケズリを加えている。第７図－12は壺形土器と考えられる。現存高は 3.4 cmである。器面色調は褐色を呈し、焼成は良好である。外面の調整はヘラナデののち粗いミガキ、内面については器面が剝落し不明である。底面には木葉痕が観察される。第７図－13は甕形土器である。器面色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は内外面ともハケ整形である。口唇部ヨコナデはみられない。第８図－14は甕形土器である。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、外面及び口縁部内面はハケ整形，胴部内面はヘラナデである。

以上、第６図－３・４・８を除き、周溝内覆土から出土したものであり、相互の共伴関係は不明確であるが、基本的に五領１式に比定されるものである。ただし、その中で第７図－13・14は、口唇部が面取りされ、また頸部の屈曲がゆるやかで頸部内面に綾をもたない点から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

００５遺構（第５図－２・３　第８図）　第５図－２・３はミニチュアの土器である。２は体部下半のみ遺存する。底部は外方へ強く張り出す。現存高 2.0 cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、外面がハケ，内面はヘラ先でナデている。３は椀形の器形をとる。体部約1/3を遺存する。口径5.0cm，器高 2.0 cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内外面とも指ナデののち体部上半にヨコナデを加える。第８図－１は壺形土器である。口縁部１/2程度遺存する。口縁部は二重口縁となり、２個６単位の棒状浮文を付加する。棒状浮文は指頭により、先端をつまみだした粗製のものである。口径16.2cm、現存高12.5cmを測る。器面色調は褐色、焼成は良好である。調整方法は、外面はハケ整形であり、複合部のみヘラ先でケズリ状のナデを施す。内面はヘラナデを基調とし、口縁部局部的に外面とは異なる施工具のハケが観察できる。第８図－２は小形の壺形土器である。口縁部一部のみ欠損する。口径 8.4 cm，器高10.7cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。胴部外面は縦方向のハケののち上方から斜方向に再調整する。口縁部はヘラナデののち局部的にハケ整形が加えられる。口縁部内面はハケ整形、胴部はナデ調整である。第８図－３は壺形土器と考えられる。底部2/3程度を遺存する。現存高は5.6cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は不良である。器面調整は、外面はヘラナデ、底面についてはヘラナデののちミガキを加える。内面はヘラナデによる。第８図－４・５は台付甕形土器の脚台部である。４は脚台部のみ遺存する。現在高は 7.7 cmを測る。器面色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は胴部接合部に上方からのハケ、以下平滑なナデである。内面は指ナデを基調とし、ハケを加える。５は脚台部のみ遺存する。現存高は 6.1 cmである。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。外面調整はヘラナデを基調としハケを加える。内面はヘラナデののち下半部にハケ整形を施す。第８図－

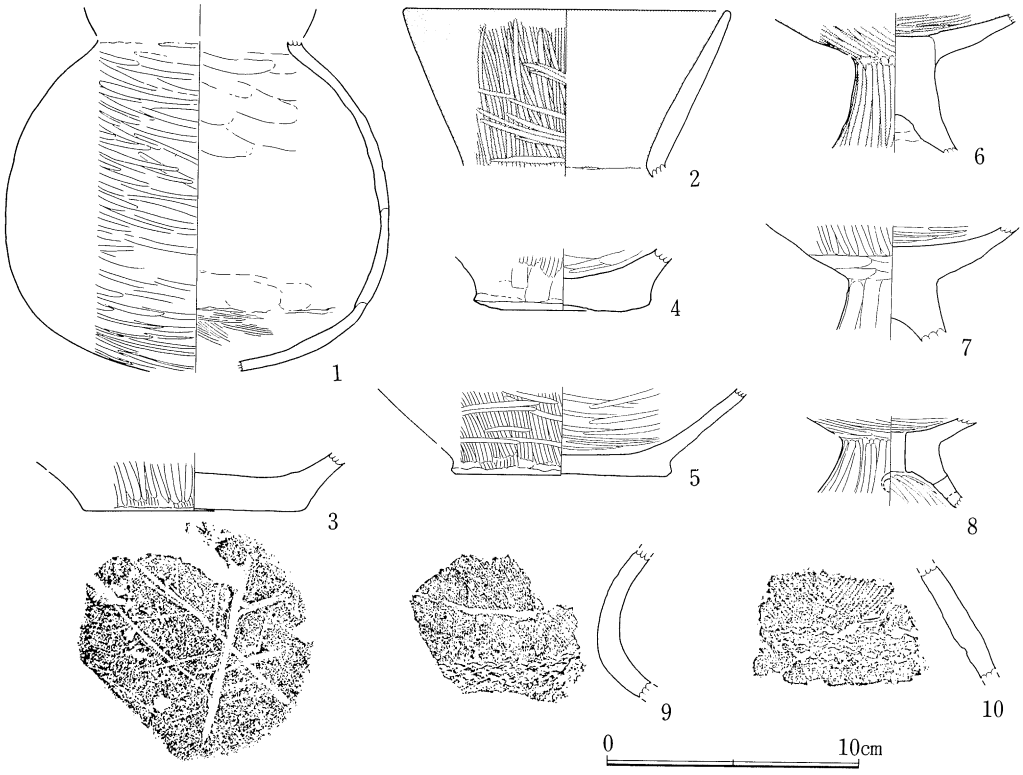


第8図　005遺構出土弥生土器・土師器

6は広口の小形の壺形土器である。胴部1/4を遺存する。現存高は8.3cmを測る。器形、とくに頸部径についてはや不明確である。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、内外面ともヘラナデののち粗いミガキを加える。第8図－7は、甕形土器と考えられる。底部1/2程度遺存する。現存高2.8cm、底径6.7cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、外面が浅いハケ状の擦痕を残すヘラナデ調整，底面および内外はヘラナデである。第9図－8は甕形土器と考えられる。底部2/3を遺存する。現存高は2.4cm，底径は5.4cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。外面の調整はハケ整形ののち底部周縁部にヘラナデを加える。内面はヘラナデである。第8図－9は、甕形ないしは深鉢形を呈すと考えられる。底部1/2を遺存する。現存高は3.8cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。外面の調整は粗いミガキ。内面については器面状態が悪く不明確である。第9図－10は甕形土器である。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は外面および口縁部内面はハケ整形、胴部内面はヘラナデである。口唇部にはヘラによる刻目をもつ。第8図－11・12は、同一個体と考えられる。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面外面にはハケ状の条線を残す。内面は指ナデと考えられる。口唇部は押捺により波状を呈す。胴部には段をもち、ヘラ先による刻目を加える。第8図－13は、壺形土器の受口状の口縁である。棒状浮文をもつ。また口縁下に小孔を穿つ。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。内外面とも赤彩されている。器面調整はヘラナデによる。

005遺構は、五領1式を主体とする。ただし、第8図－9～13は弥生土器であり、9・11～13は宮ノ台式に，10は終末期に比定される。

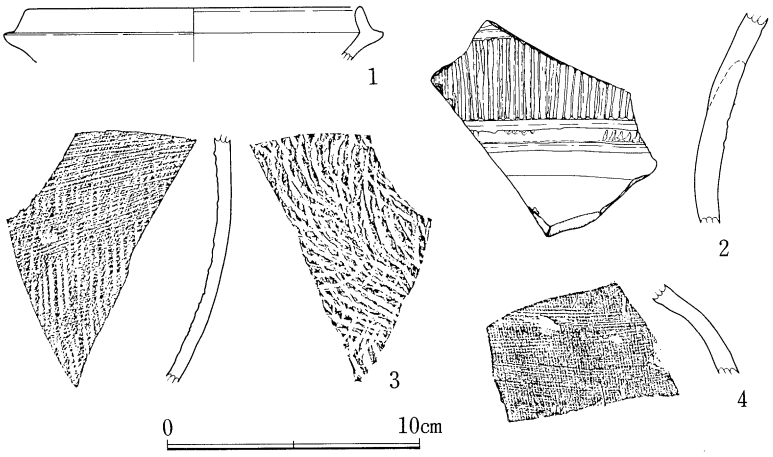
吉野1号墳周溝・004号遺構（第9図）　覆土内より一括出土したものである。第9図－1は壺形土器である。胴部2/3を遺存する。現存高は13.2cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整は、外面が横方向のヘラケズリののち粗いミガキ，内面はナデを基調とし、下部はハケ整形である。口縁下は指頭によるナデ痕を明瞭に残す。第10図－2は壺形土器である。口縁部1/3を遺存する。口径13.0cm、現存高6.7cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。内外面とも赤彩されている。外面の調整は、ナデののちミガキ。内面はナデ調整を施す。第9図－3は壺形土器と考えられる。底部のみを遺存する。現存高は2.3cm、底径は8.6cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は不良である。外面の調整はハケ整形ののちミガキを加える。内面はヘラナデである。底面には木葉痕がみられる。第9図－4は甕形土器と考えられる。底部のみを遺存する。現存高2.4cm、底径7.0cmを測る。色調は褐色であり、焼成は不良である。外面の調整はハケ整形ののち底部周縁部にヘラナデを加える。内面はヘラナデである。底面はやや凹底になり、ナデ調整される。第9図－5は甕形土器と考えられる。底部のみを遺存する。現存高は3.5cm、底径は8.7cmを測る。色調は明茶褐色であり、焼成は不良。



第９図　吉野１号墳周溝・００４遺構出土弥生土器・土師器

外面の調整はハケ整形ののち粗いミガキ。内面はヘラナデののち粗いミガキを施す。底面はヘラナデ調整による。第９図－６は高杯形土器である。脚部上半のみを遺存する。現存高は 5.5 cmを測る。色調は褐色、焼成は良好である。外面及び杯部内面は赤彩されている。外面の調整はヘラナデののちミガキ。杯部内面はミガキが施される。第９図－７は高杯形土器である。杯部・脚部接合部のみを遺存する。現存高は 4.6 cmを測る。色調は明褐色、焼成は良好である。外面の調整は、ヘラナデののち、杯部はミガキを加える。杯部内面はミガキである。第９図－８は器台形土器である。器受部・脚部接合部を遺存する。現存高は 3.5 cmである。貫通孔及び脚部に４孔を穿つ。色調は褐色、焼成は良好である。外面の調整は丁寧なミガキである。器受部内面はミガキ。脚部はヘラナデである。第９図－９・10は壺形土器胴部の文様部である。胎土・焼成等類似する。色調は褐色、焼成は良好である。ともに結節文により区画された単節の縄文が施文される。器面調整は、９はハケののちナデが施される。内面については、ともに器面の状態が不良であった。

以上五領式を主体とするが、第９図－９は、頚部に文様帯を構成しない点、頚部の屈曲、ハケの使用から、第９図－10とともに、第７図－13・14、第８図－10と同時期の所産と考えられる。五領式を含め、台付甕形土器が多い点など、市内土宇遺跡と似た様相を示す。



第10図　吉野１号墳出土須恵器

土製品（第７図－15、図版10）

003 方形周溝墓より土玉が一点出土している。高さ1.31cm、径1.21～1.35cmを測る。褐色を呈し、器面に明瞭な整形痕は認められない。一方向より穿孔されている。　（大村　直）

須恵器（第10図）

吉野１号墳墳丘および周溝からは、第10図に掲載した４点を含む21点の須恵器片が出土している。第10図－１は、周溝覆土中より出土した杯身細片である。胎土中には、白色細粒石が含まれている。焼成は良好であり、内外面とも暗灰色を呈している。復原値は、口縁部径13.2cm受け部径15.1cmと推定されるが、細片のため誤差の巾は広い。第10図２～４は、墳丘より表採された甕・壺類の小片である。甕頸部（２）には、５本を一単位とした縦方向の櫛描きが施されており、沈線（上端１条・下端２条）によって区画している。櫛描きは、文様帯の上端部より施文されたものと思われる。胎土中には、黒色微粒・白色微粒が含まれている。焼成は硬緻であり灰色を呈している。内面には、自然釉の付着がみられる。甕胴部片（３）は、内外面に成形痕を残すもので、暗灰色を呈している。図示しなかった17点のうち12点が同類の甕胴部片であった。壺類小片（４）には、外面にハケ目状の整形が施されている。胎土中には、若干の石英細粒と黒色微粒が含まれている。焼成は良好で、白褐色を呈している。

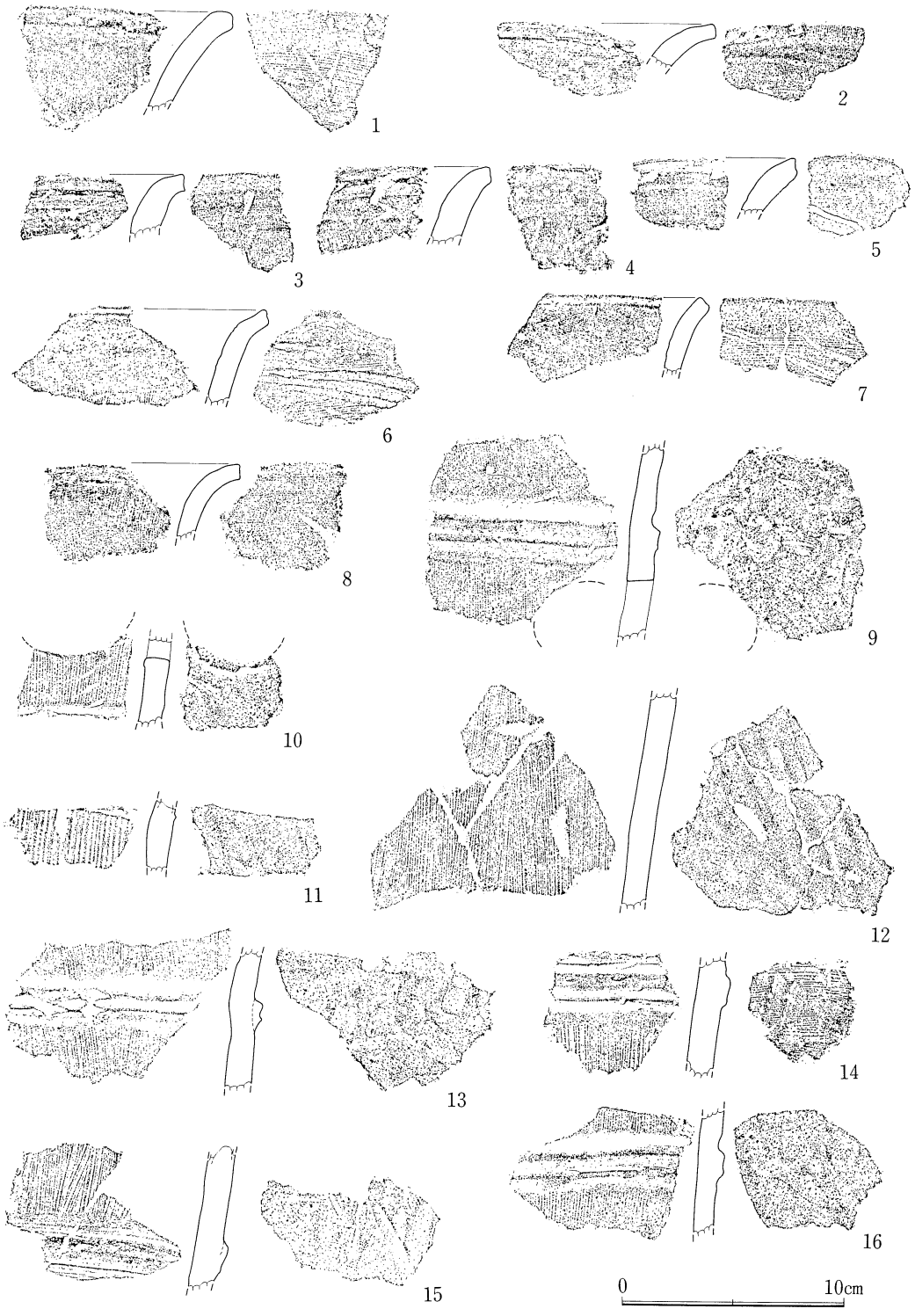
吉野１号墳に伴う須恵器片は、以上のようにいづれも小細片であり、時期の推定に足る充分な資料とは言い難い。しかし、第10図－１に掲げた杯身は、推定される形態や法量からみて６世紀後半の所産と考えられる。　（田所　真）

埴輪（第11・12図、図版11）

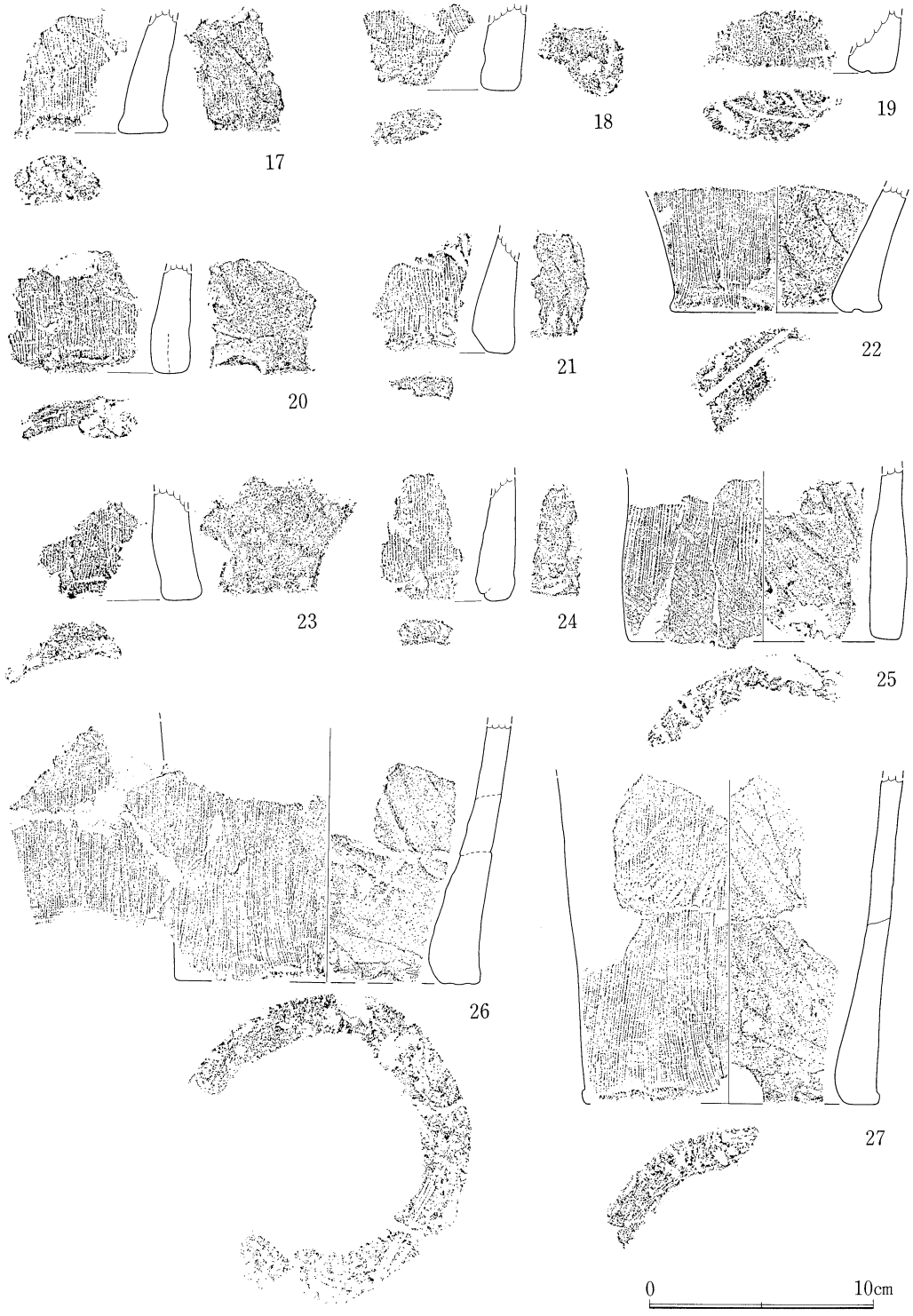
今回の南岩崎吉野遺跡の調査によって埴輪片が発見されている。調査地区が市指定史跡吉野１号墳に接した地点であったため、出土した埴輪類は、吉野１号墳構築に際し用いられたものと考えられる。

出土状態は、調査地域内から検出された吉野１号墳の周溝内あるいは、周溝周辺地域からであるため、原位置を保っている例はなく、散在的に出土したものである。

出土した埴輪片は、円筒埴輪の破片のみと思われたが、中に１点形象埴輪の破片としか考え



第11図　吉野１号墳出土埴輪(1)



第12図　吉野１号墳出土埴輪(2)

られない例も見られた。

円筒埴輪の中から残存状態の良好な例を選出し、第11・12図としてまとめた。図に見るように、円筒埴輪全体の形状・規模等を把握し得る例は一例も見られないが、口縁部，胴部，基部の各部位の破片が出土しているので、各部位については大凡把握できるものと思われる。

大きさは、余り大きくはなく、比較的小型で、２条の突帯と３段による形状をもち、２段目に円形穿孔を有する円筒埴輪と考えられる。

口縁部を第11図１～８としたが、反り具合，厚さ，口唇部等に若干の相違を認めることができる。また、表・裏面における調整方法にも相違が見られる。口縁部は大きく外反し、ラッパ状に開き、表・裏面共にハケメ調整を行うが、口唇部直下からハケメ調整の行われる例と、口唇部直下に２cmほど無文帯を残す例とがあり、表面は縦方向に，裏面は斜方向あるいは横方向にハケメ調整が行われ、裏面においては、ハケメ調整の後、篦状工具によるナデ痕を残す例も見られる。

９～16は胴部破片をまとめたが、胴部においては、突帯部の形状，ハケメ痕から見る調整工具，裏面部における調整方法などに相違の見られるものがある。また、円形穿孔部分の破片が２点（９・10）見られた。

第12図には、基部の実測拓影図を掲載した。出土した円筒埴輪片の中では基部破片の残存状態が最も良く、底面部の径が捉えられる例が幾つか見られる。

基部には、断面図を見ても明らかなように、傾き具合，末端・底面部の作りに大きな違いを見せる例がある。傾きでは、内傾するもの(23)，直立するもの(18・20・24・25)，外反するもの(17・22・26)の別があり、底面部は部厚くなる17・22・26・27などの例と、薄く作られる25などが見られる。ハケメ調整痕は表面にのみ縦方向に施され、裏面は斜方向を主とする指ナデによって整形されている。また、底面部に埴輪の製作過程最後の段階で、正立させた際に残されたと思われる痕跡を、沈線状に見る例がある。その顕著なものには、19・20・22が挙げられ、19は木の葉文を思わせ、20は棒状に、22は直線的な沈線文的に残っている。なお、形象埴輪片については、小片であり部位不明のため割愛した。　（米田耕之助）

3　小　結

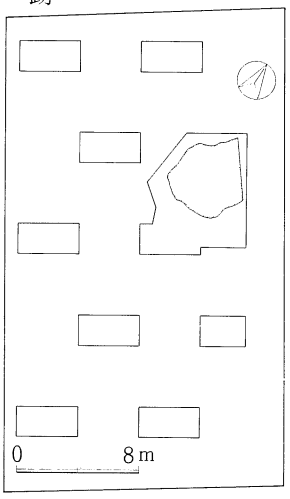
今回の調査による成果は、これまで報告してきたとおり吉野１号墳及び古墳時代前期に属する遺構群である。吉野１号墳については、周溝の一部の調査であったが、若干の須恵器，埴輪などの出土から、より正確な規模，時期を知る手掛かりを得たと言える。また、古墳時代前期の各遺構については、極めて短期間に集落から墓域へ、そして、性格は不明であるが他の目的でこの地域が使用されたことを示している。今回の調査は、この吉野台という地域が、弥生時代から古墳時代にいたる各種の遺跡が濃密に分布している事を明らかにした。（清藤一順）

第５章　鶴舞広小路遺跡

遺跡は、鶴舞城の一部と考えられ、北から入り込んだ谷の谷頭に位置しており（第１図）、調査は、574㎡の区域を対象に行った。まず、調査区域に沿って４ｍ四方のグリッドを設定し、約10％の確認調査を行い、確認された遺構について拡張し本調査を実施した（第２図）。確認できた遺構は、直径約５ｍの不整円形プランを呈し、深さ約２ｍの土壙１個所であった。

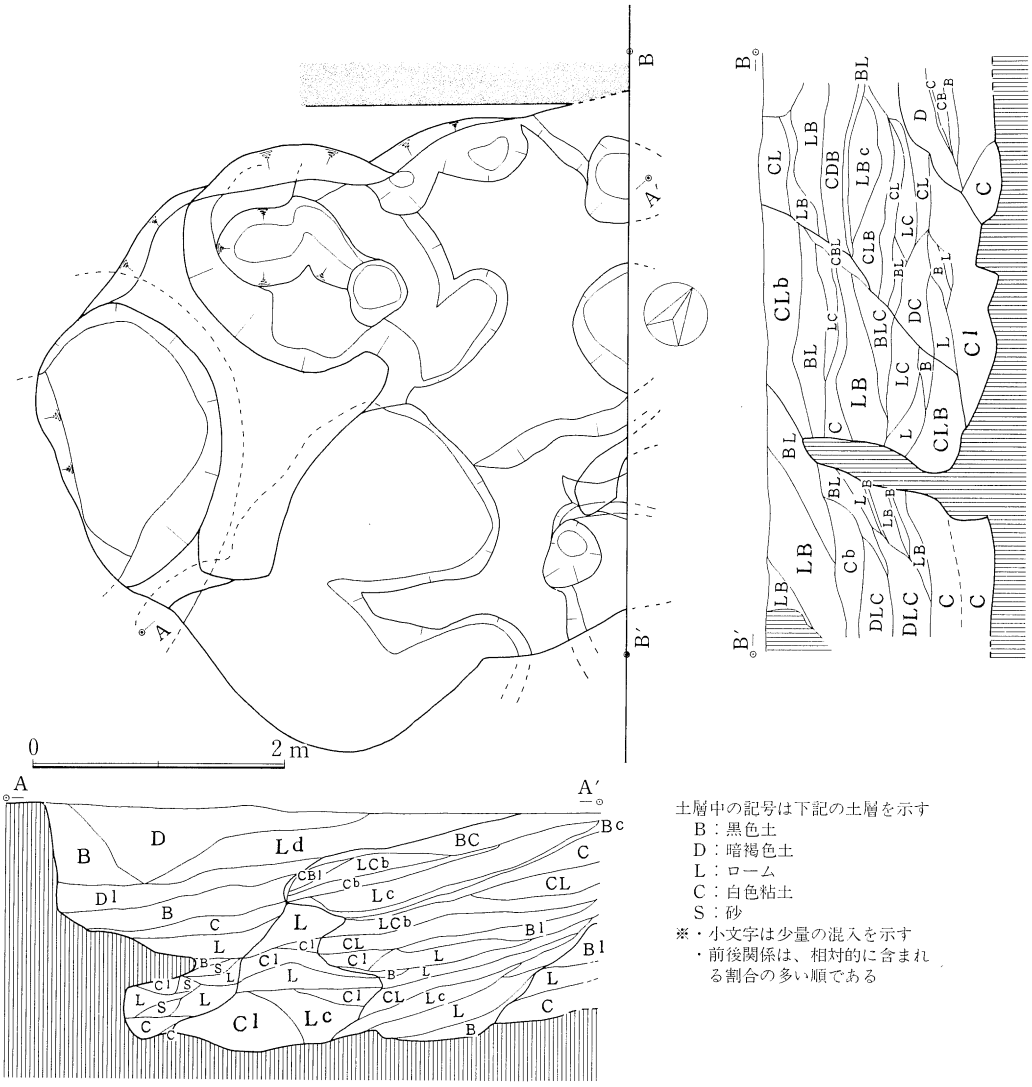
土　壙（第３図、図版12）

規模は先に述べたとおりであるが、底面については壁がオーバ



第２図　調査区域と検出した遺構

第１図　調査範囲と周辺地形図



第3図　土壙

ーハングしている為、一部を除き完掘出来ず、規模は確認していない。しかし、底面全体は白色粘土層を約20cmから30cm、ほぼ平坦に掘り込まれて築かれているようである。

覆土は、上部および一部に黒色土、褐色土が比較的見られるが、殆ど、ローム，白色粘土から成る土が相互に堆積している。また、断面の状況から、数次にわたる重複が認められる。遺物は、覆土中からは、2cmから3cmの小石のほか、若干の土師器片が出土しているが、いずれも小片であり、図示できるものは無い。

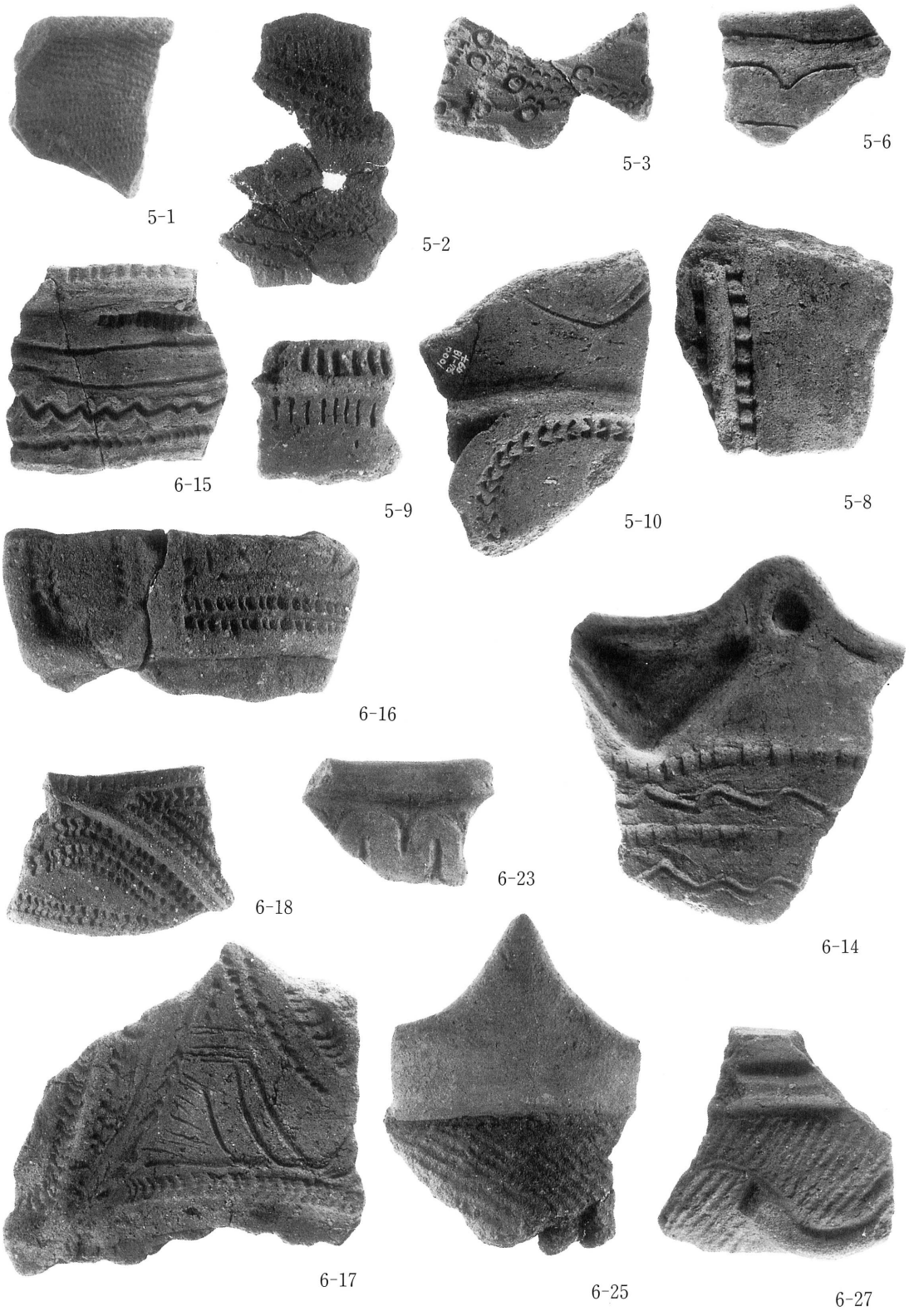
この性格については、断定出来得る根拠には乏しいが、底面の層位及び覆土から、一度築いた穴を埋めながら拡張した粘土採掘の跡と考えるのが妥当であろうか。　　（清藤一順）

図版 1

住居跡・炉穴・溝検出状態

方形周溝状遺構検出状態

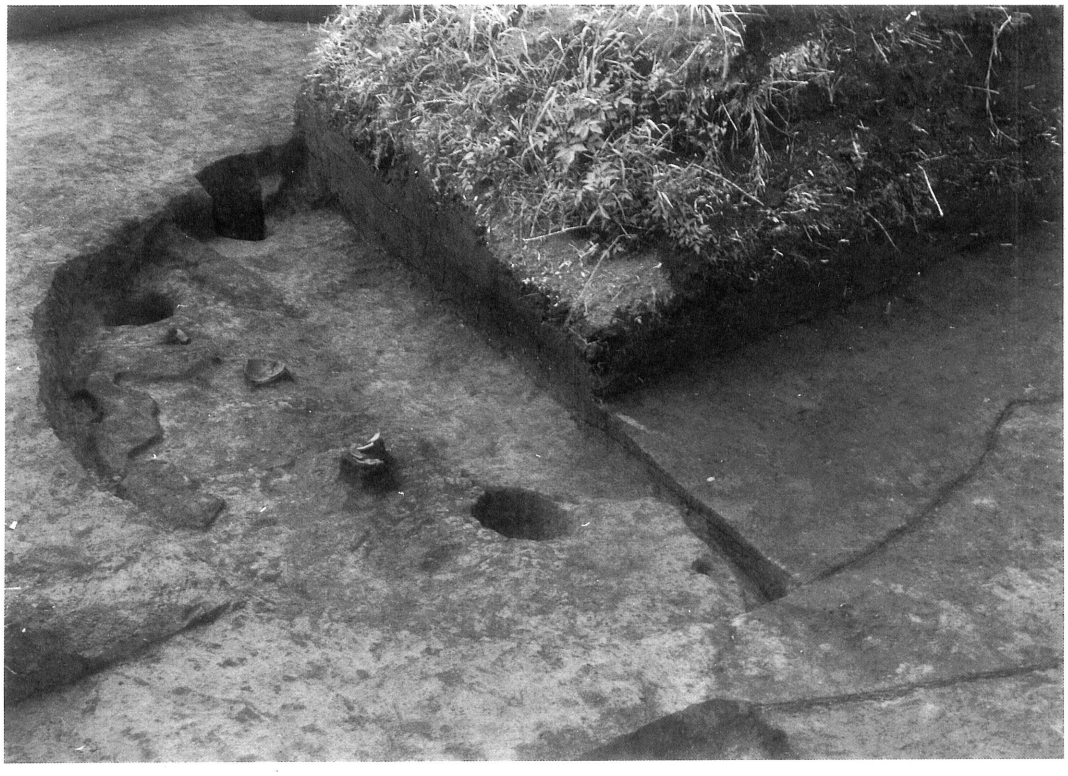
図版 2



北旭台遺跡現況

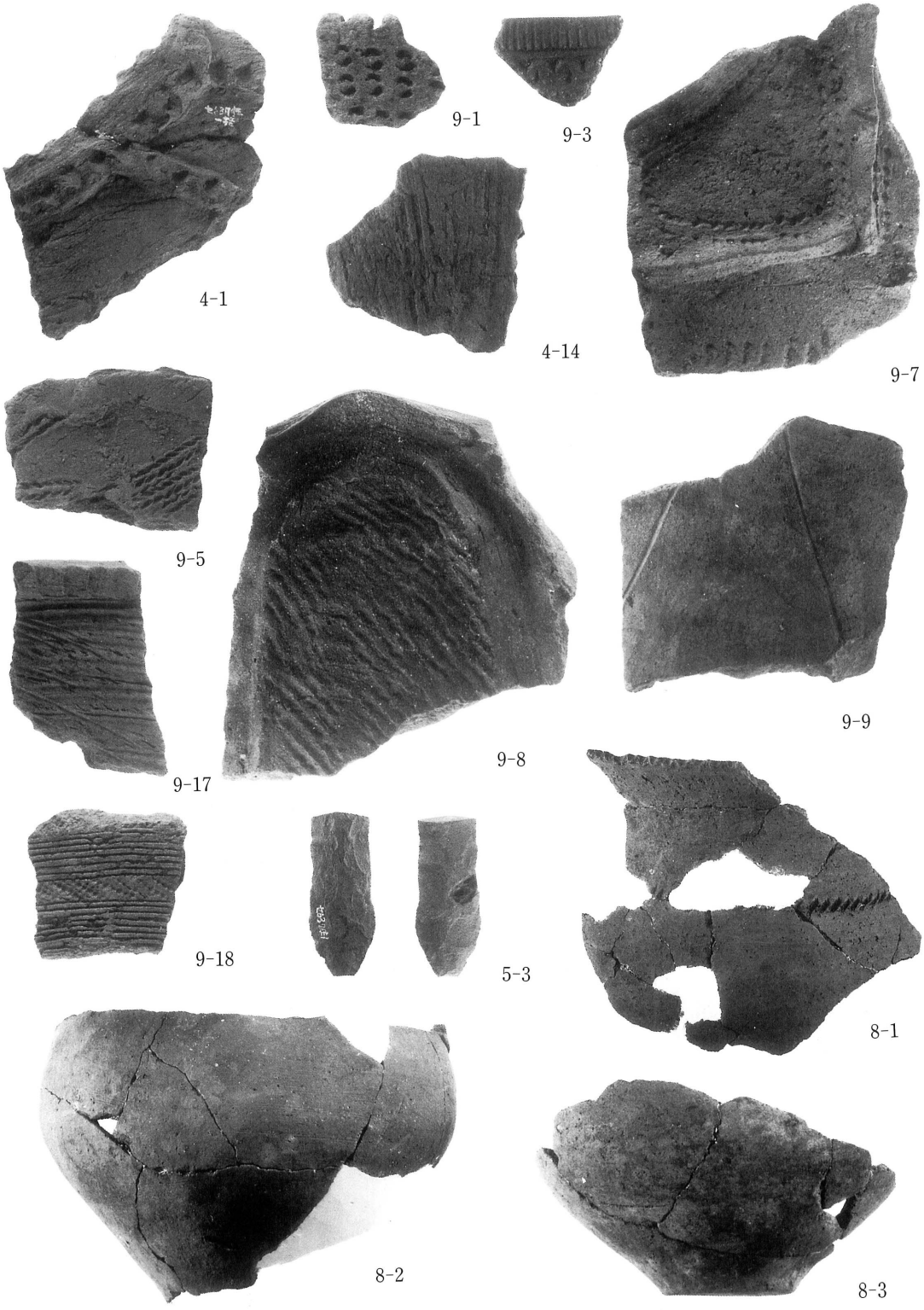
No. 2 トレンチ周辺現況

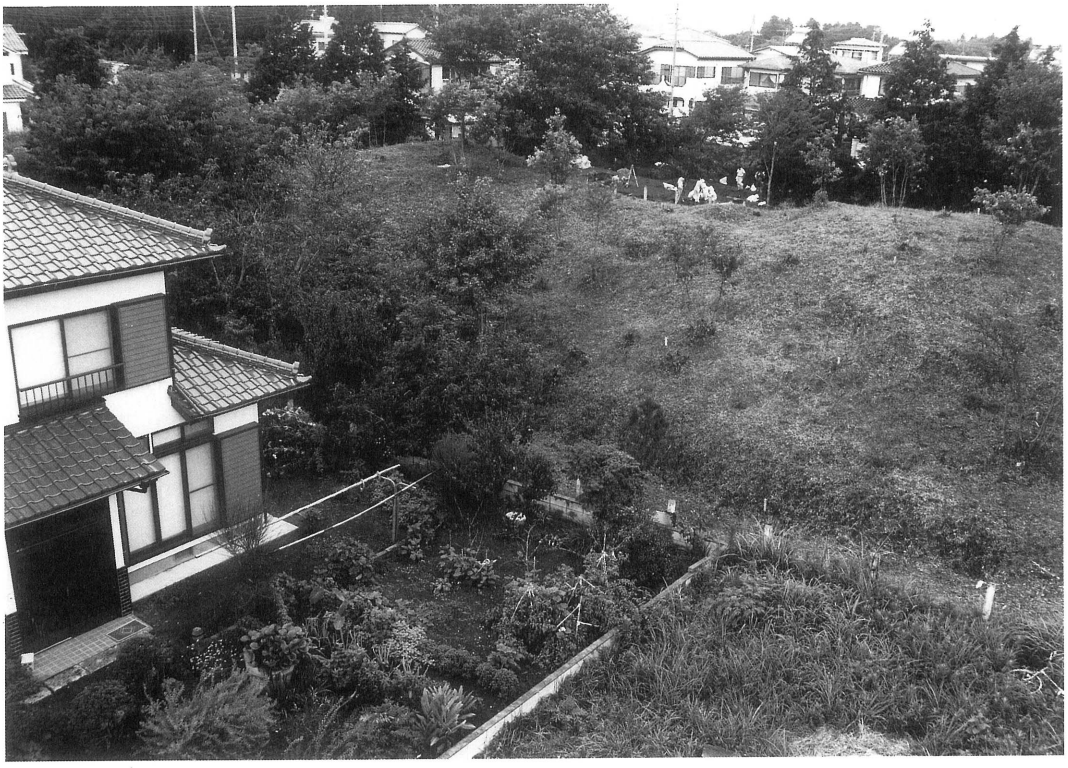
第 7 号遺構検出状況



第10号遺構検出状況

図版 5



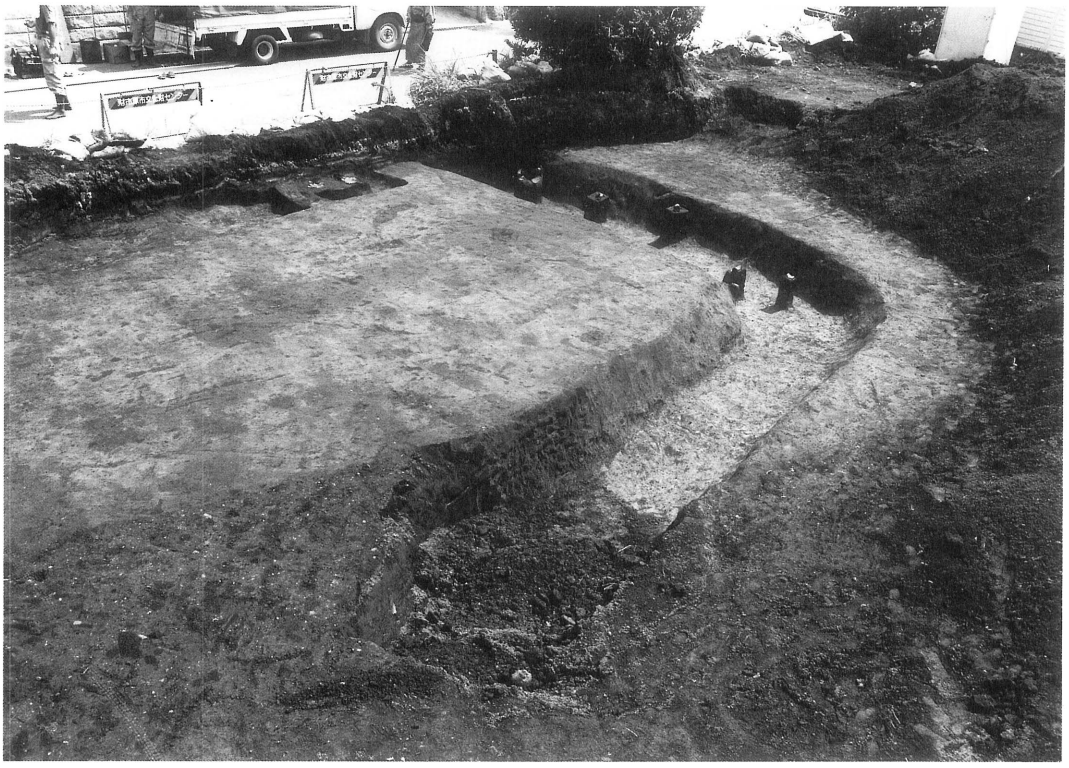


吉野１号墳現況近景

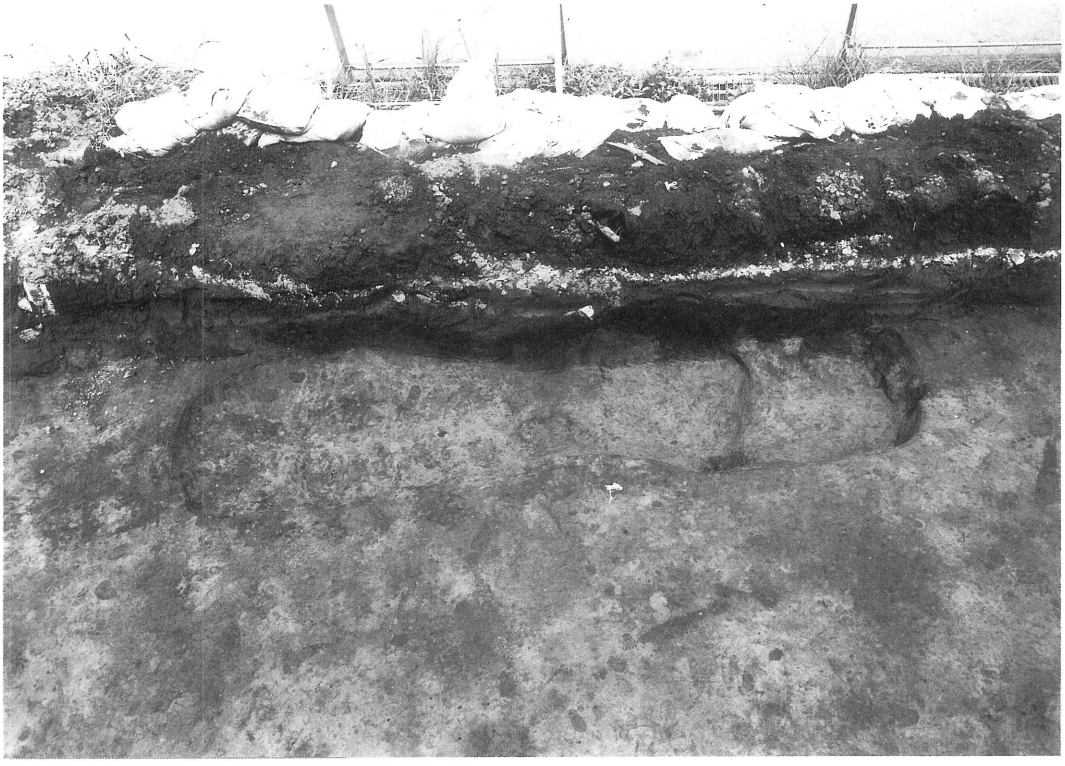
吉野１号墳周溝検出状態

００２住居跡（東から）

００５遺構（西から）



００３方形周溝墓



００３方形周溝墓主体部

００３方形周溝墓周溝遺物出土状況

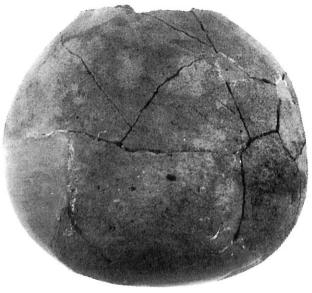
００５遺構遺物出土状況

6-1

6-4

6-3

8-1


9-1

8-7

5-1

8-2

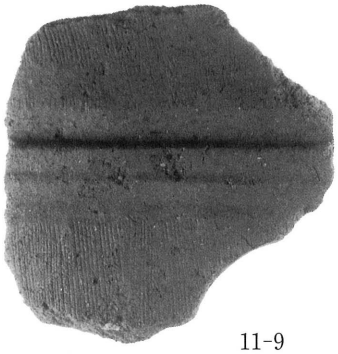
8-6

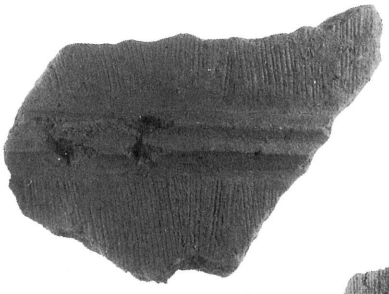
7-15

11-1

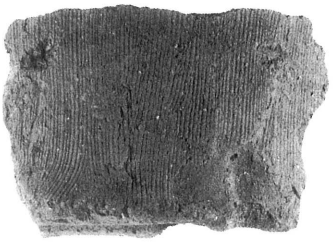
11-6

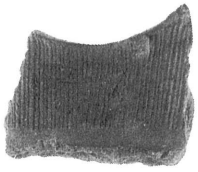
11-7


11-9

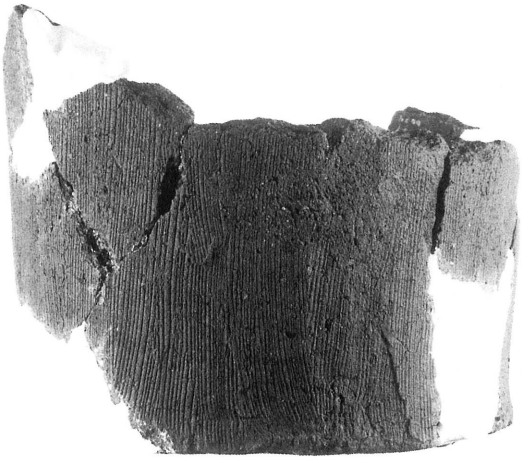

11-13

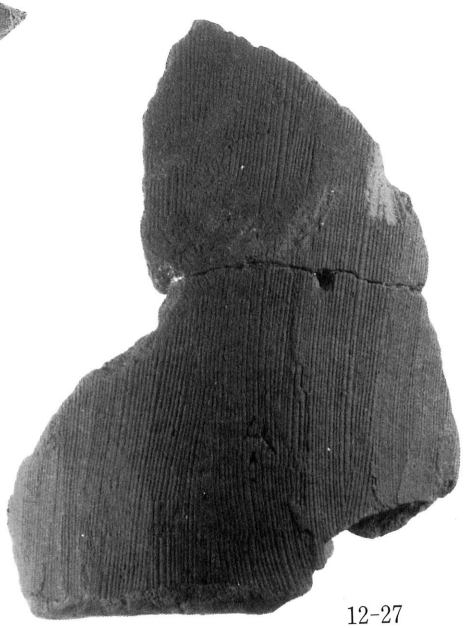
11-14

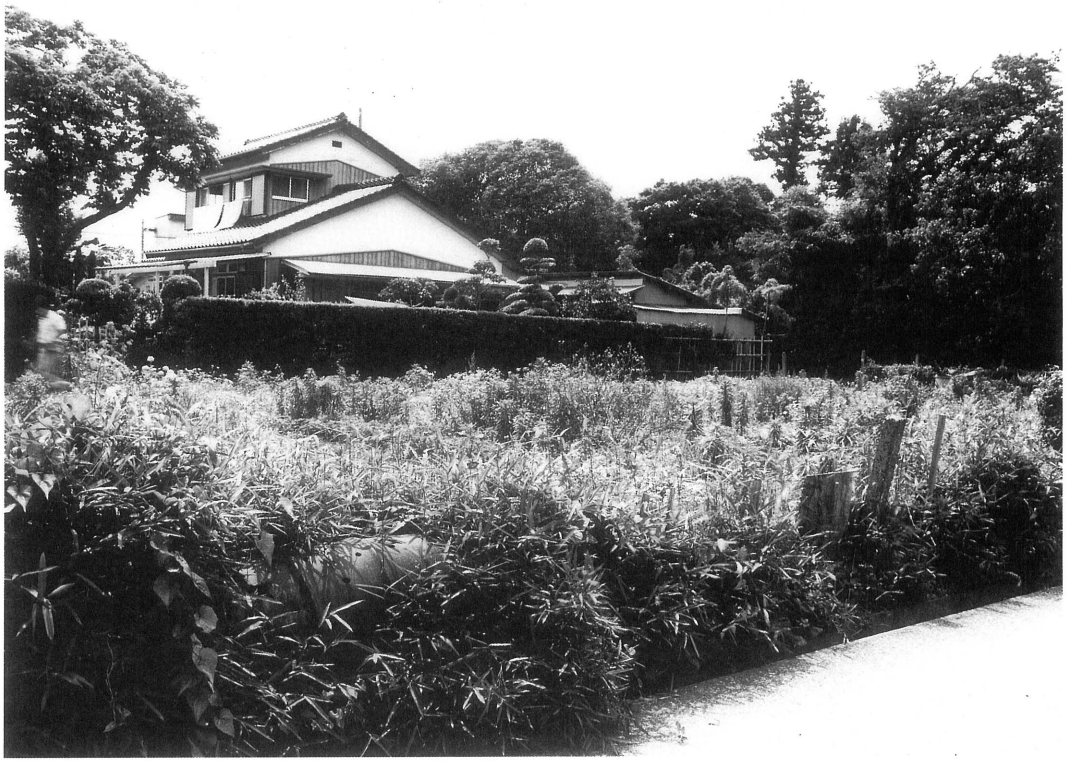

12-22


11-10

11-15

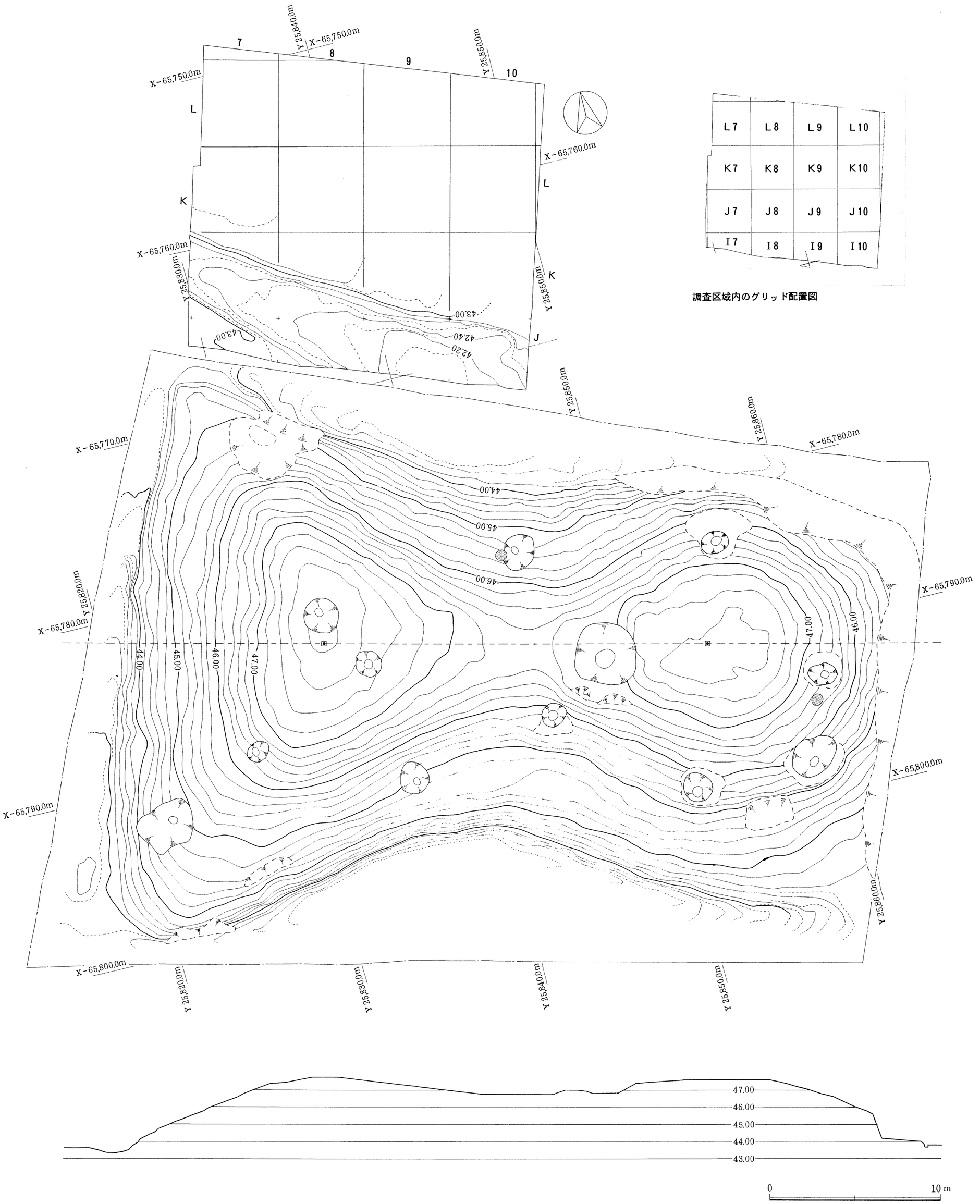

12-26


12-27



調査区調査前

土壙



調査区域内のグリッド配置図

付図　吉野一号墳・発掘区とグリッド配置図

昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書

昭和63年３月18日　印刷

昭和63年３月25日　発行

編　集　　**財団法人　市原市文化財センター**

市原市馬立817番地

発　行　　**千葉県市原市教育委員会**

市原市惣社1040－１番地

印　刷　　**三陽工業株式会社**

市原市五井5510－１番地